

そして今日も日は昇り 空は青く澄み渡る

豊かな大地は光に溢れ 草木はすすくすく天を向く

小鳥は揃って歌いだし 子供は笑って手を叩く

町の鐘は鳴り響き ラッパの調べが身を包む

歌いましょう

ひとつの世界に

滅びの詩を 聞かせましょう

やがて世界は詩に至る

八月二十四日

夕方から降り出した激しい雨はサウナのような八月の都市を一気に冷却し、澱ませていた埃と塵と、暑気による苛立ちを洗い流した。夕立かと思われたが夜になっても上が  
る気配はなく、多くの人々が眠る頃には糸のように細い雨となっていていつまでも降り続い  
ていた。

テーブルを挟んで二人の若い男が向かい合って椅子に腰掛けていた。さほど広い部屋  
でもなく、中央にテーブルを置けばそれだけでもう埋まってしまう程度だが、天井に付  
けられた小さな蛍光灯は部屋の光を補いきれてはいなかった。テーブルの上には温くな  
った缶ビールと、相当な量の煙草が捨てられた灰皿、中央には表を向いたトランプが積

まれていた。

「山羊の番だよ」

一方の男が正面の男の顔を見て言った。黒い髪が乱れて肩まで伸びている。二重瞼の大きな目は酔っているようで焦点が定まっていない。鼻が高く口も大きい。座ってはいるが、もう一人の男と比べると相当背が高い。一目見てはモデルのような美男子に見えるが、二目見ると目鼻立ちがはっきりしているだけでそれ程でも無い事に気付き、三回見ればこの男が漂わせている奇妙な雰囲気を感じられ、一歩下がっておくべきだと知る事ができた。

山羊と呼ばれた男は黙って手持ちのトランプの一枚、クローバーの8を中央の山の頂上に置かれていたスペードの6の上に乗せた。この男の方は山羊と呼ばれてはいるが、角が生えているわけでも鬚が長いわけでもなく、先の男と比べるとまともな人間に見える。髪も短く髭もなく、細い目と低い鼻をしている。いくらか童顔ではあるが、その眼差しは充分落ち着いている。良くも悪くもスーツを着てオフィス街を歩けばすぐに紛れる事ができそうだった。山羊は男を見ると同時に、男の背後の窓から薄暗い都市の風景

を眺めた。看板のネオンを受けて細かい雨が明滅している。もう遅い時間だがマンションの12階から見えるこの都市が暗黒に染まる事は決していない。いつまでも看板のネオンや外灯によって薄暗く輝き、下を走る車の騒音が絶えずどこからか聞こえていた。それらは途切れることなくまた朝を迎える。男が手持ちのトランプを一枚、山羊の積んだ山の上に静かに置いた。ダイヤの8だった。

「シジン、同じ数字でも良いんだっけ？」

山羊が男に尋ねた。シジンとは男の渾名だ。詩人と書く。山羊とは大学で同期生だったシジンは、卒業して三年経つが毎日詩を書いて過ごしている。売れたという話は聞いた事がないので、どうやって生計を立てているかはよく分からなかった。実家が地元の名士だとか金持ちの恋人がいるという噂は聞いたが、どれもあてにはならない。本人は全くその話題には触れようとしなかった。

一方の山羊は会社員だ。本名は八木。微妙なアクセントの違いで彼はシジンにそう呼ばれていた。

「カードの種類が強ければ同じ数字でも置けるんだ」

シジンがやや大きめの声で答えた。今日の夜がはじまる頃、山羊の元に突然シジンがふらりと上がり込んできた。山羊も退屈だったのでしばらく二人でとりとめもない話をしていたが、やがて話題も尽きるとやはり元通り退屈になった。雨が降っているので外へ出るのも億劫だった。そんな時ふいにシジンが部屋の隅に転がっていたトランプを発見し、ゲームをする事になった。ルールはシジンが自分で思い付いたものだった。単純に、トランプの山から十五枚ずつ引き、数字が多くなるように順番に手札を出していく。当然13の数字が一番強いのだが、ただ一つ、その上に1ならば置く事ができる。それ以外の数字は置くことができない。そしてもちろん1は13以外の全ての数字に負けてしまう。そういうルールだった。カードの種類の事は何一つ触れられてはいなかった。「カードの種類に強さがあるなんて聞いていないぞ」

「そうだったけ？　じゃあ覚えておくと良い。一番強いのはダイヤだ。次がスペード。その後がクラブで、一番弱いのがハートだよ。だから山羊の出したクラブの8の上に僕のダイヤの8を乗せる事ができるんだ」

「今決めたんじゃないのか？」

「とんでもない。一番強いのはダイヤだよ。これまでもそうだったし、これからもそうだろう」

山羊は曖昧に聞き流してシジンのルールに従った。静かな部屋の壁にかすかに共鳴する雨の音は、無音以上の静寂をもたらしている。テーブルの上では一定のリズムをもって無意味な数字が降り注ぎ、流れ、また降り注がれる。単純な作業に没頭する内に都市と、山羊の中に含まれる目に見えない澱みは徐々に浄化され、純粋な存在へと戻されていった。

「最近は何調かい？」

シジンはトランプを持たない左手で煙草を引っ張り出し、どこかで買ったのであろう。店の名前と電話番号の書かれたライターで火を点けた。傍らの灰皿には吸い殻の山が築かれている。

「どうだろう」

山羊はぼんやりと答えた。煙草の煙が頬を撫でた。

「日々淡々と与えられる仕事をこなして、日が暮れる。という感じかな」

「良いじゃないか。こなせられる仕事を日々与えられるなんて」

「そつだろつか？」

そんな気もするし、それではいけない気もする。日々充足しているが充実はしていない。時間だけは経ってゆく。それを充足とみるか浪費とみるかは紙一重の状態にあった。

「少なくとも山羊には合っている気がするよ。君はあらゆる出来事を寛大に受け止められる才能がある。僕には真似できない」

「誉めているのか？」

「そんなもの自分で決める」

トランプゲームは徐々にいい加減なものになってきた。二人とももう手札をテーブルの上に投げ出して一枚一枚山に積んでいく。山羊は缶ビールを一口含んだ。テーブルの隅に寄せられた空き缶は相当な数になっている。山羊の家の冷蔵庫に入れられていたそれらのほとんどはシジンによって空けられたものだった。時計の針は午前二時を回ってから随分ゆっくり動いているように感じられる。雨音はもう注意しないと聞き取れない程小さくなっていったが、それは山羊の耳が慣れてしまったのかもしれない。気が付けば

トランプを動かす手が止められなくなっている。止めようと思えば止められるはずなのに、そうするのが非常に重く感じられる。開いたトランプからお互いに山を作ってゆく。まるで占いや呪いといった儀式的な行為だった。しかしいくら繰り返しても、ここから何が読み取れる訳でもない。

「山羊はクラブばかりだな、僕はハートしか残っていない」

シジンが山羊の手札を見て楽しそうにそう言った。そう言いつつもゲームを流そうとはせず、一枚一枚負けると分かっているカードを出し続けていた。積まれるハートの絵は確かに貧弱に見え、山羊にはなぜかそれが残念に思えた。

「詩は、どうだい？」

山羊は危つく引き込まれそうになるトランプから目を離すと、シジンの大きな瞳を見つめて尋ねた。シジンの瞳はさらに焦点がぼやけている。眠いのかも知れない。

「もちろんやっているよ」

シジンは怠<sup>たふ</sup>そつに答えた。

「売れたか？」

山羊が尋ねると、シジンは虚ろな表情で首を傾げた。  
「売れる？」

「詩だよ。ちよつとは売れたのかい？」

「いや、売れていないけど、売れてどうするんだ？」

シジンは真顔で山羊に尋ねた。考えた事も無いという表情だった。

「売れたらお金が入る」

山羊は自分で言つて、自分自身が何だかいやらしい生き物のように思えた。売れる売れないを詩人に尋ねるのはもの凄く失礼なのではないかと考えた。しかしシジンは山羊の答えに対して面白そうに笑っただけだった。

「売れたらお金が入る。それも真理だな。でも売る事を考えると詩というのは凄く非合理的じゃないかな？」

山羊は黙つて頷いた。

「詩なんて多くの人間にとつてはあつても無くてもどうでも良いものなんだ。人生の瞬間、極めて一瞬の余裕ある感情の転換時に求めたりするんだよ。ただそれだけの隙間産

業だよ。商売とすればね。儲かるわけがない」

しかしシジンは『詩人』だ。他に何もしていない。日長一日詩を思い付いては消している。どんな手段を用いているかは分からないが彼はそれでも社会から許されている。

山羊にはそう見え、それが非常に羨ましく思えた。毎日淡々と続く仕事に嫌気がさしているのかも知れない。しかし山羊にはそこから脱して詩人になる勇氣も能力も持っていない。

「詩人というのは自分でそう思った瞬間から詩人になれるんだ。資格もなければ試験によつて選別される事も無い。道具も要らない。ペンも必要としない。舌だつて、本当は無くても良いんだ。何も要らない。だから僕は詩人になったんだ。それだけで僕はどれだけ救われた事だろう」

山羊の気持ちを讀んだかのようにシジンは遠い目で天井の照明を見つめながら呟いた。もう相当酔いが回っていた。それは山羊も同じ事だった。いつの間にかトランプゲームは終了している。時計の針は午前三時を回っていた。山羊は明日の仕事の事を考えた。どう考えてもつまらなそうに思えた。

「詩を聞かせてくれないか？」

山羊はシジンに頼んだ。シジンはしばらく山羊の目を見つめ、やがて口の端を歪めて笑った。

「嫌だ。眠い」

シジンは机に頭を置き、クスクスと笑っていた。山羊の酒に浸された脳が緩やかに波打ち、底の方で突発的な怒りが発生した。詩人の癖に詩を求められても詠わない事が入らなかつた。その余裕に苛立たされた。

「そんな事が許されると思っているのか？ いや今の事じゃない。今の事は良いんだ。詩人なんだろう？ 君はいつだって適当にあしらったり悠々自適に生活しているが、そんな事だと世間では許されないぞ」

その言葉は親心のようなものでも友情でもなく、ただの嫉妬でしかなかった。しかしそれが間違っているとは思えなかつた。シジンは閉じていた目をゆっくりと開くと、テーブルに突っ伏したまま横向きに山羊の目を見つめた。

「世間とは、なんだ？」

シジンは先程までの濁った目ではなく、はっきりとした眼光をもって山羊の瞳を射抜いた。

「世間には僕は含まれないのか？ 僕はいつの間にか世間から外されてしまったのか？」

山羊はただ黙り込んでいた。

「学校で勉強してれば世間的な学生か？ いい年になれば働いてお金を貰うのが世間的な社会人か？ 結婚しないと世間じゃないのか？ 性交して繁殖しないと世間じゃないのか？」

「怒っているのか？」

山羊が言つとシジンは少し笑った。

「僕は怒らない。山羊の勘違いを指摘しているんだよ」

「勘違い？」

「君の言つ世間は世間じゃない。君の事なんだよ」

シジンの眼光がさらに強まる。

「君は世間を代弁した風な事を言つたが、本当は君の意見を世間に代弁して貰つた事に

したんだよ」

山羊は頭に入り込んだシジンの言葉の意味を必死に読みとろうとしていた。しかしシジンの眼光による衝撃のせいで理解力はほとんど削がれ、頭の中ではただ言葉の表面を撫でている程度の集中力しか得られなかった。その内山羊が何も答えられないまま、シジンの眼光はふっと消失し、元通りの平べったい瞳になった。山羊は深い脱力感と開放感の中、シジンの言葉をゆっくりと反復した。その通りだった。世間が許さないのではなく自分が許せないのだ。世間の意見など分らない。いや、彼も含めて世間なのだ。くだらない事を言ってしまったと後悔した。

「怒るなよ、山羊」

ぼんやりとシジンが言った。

「いや、僕の方こそ悪かった。怒らないでくれ」

「だから、僕は怒らないよ」

「その割にはきつい言葉だったよ」

「詩が聞きたいって言ったのは君じゃないか」

シジンは頭を横に向けると腕を枕にしてテーブルに顔を臥せた。その様子を見つめる山羊には、彼がなぜ大学を出て3年も過ぎ、多くの友人だった者達と疎遠になった今もはや何の接点も存在しなくなった山羊の元に未だに度々訪れるのかが分からなかった。訪れては今日のように何もしいまま終わってゆく。金をせびられた事もそんな素振りを見せられた事もない。友人だからといえればそれまでだ。目の前のシジンは何の憂いもなく、穏やかな寝息を立てはじめた。何を言おうとも現実ではいつまでも社会に入れない、入ろうとしない詩人だ。寂しいのだろうか、と思った。山羊も目の前のランプをテーブルの端に集めると、同じようにテーブルに頭を置いた。部屋の音が消えると再び外の雨音が静かに響いた。寂しいのは自分なのかも知れない。このまま寝てしまうのだろうかと思っただ。

八月二十四日 夜

山羊は追われていた。

これが悪夢である事は山羊自身も分かっていたが、そこから逃れる方法がどうしても思い出せなかった。思い出す余裕すら与えられていない。気が付けば逃げ回っており、そこに至るまでの経緯は完全に切り離されていた。

西洋の城に見られる石造りの通路を山羊は全速力で逃げ続けている。体を見ると、所々血に汚れた粗末な服を着るといよりは全身にまとわりつかせた格好をしている。足は素足であちこちに擦り傷が作られており、石の床に触れる感覚は失われている。いくつもの角を曲がり、階段を駆け上がり、転びそうに駆け下りる。いくら走っても出口を

見つける事はできず、通路も延々と続いている事でこの城、あるいは城らしきものとてつもなく広大である事を知った。息が乱れ全身の筋肉が疲労によって引き裂かれそうに痛んだが、山羊は歩みを緩める事を想像できない程追い詰められていた。一体何者に？ それも分からない。時折後方を振り返ってはその何者かの様子を確かめようとする。しかしまだ姿は見えない。遙か遠くから何か巨大なものが、轟音を響かせながら山羊の元に向かっていく。地響きが足下にまで伝わる。山羊は理由が全く分からないまま、しかし絶対に追いつかれてはならない事を確信しつつ走り続けている。

やがて天井が途切れ暗黒の空が頭上に広がった。右斜め上方に真円の月が赤黒く浮かんでいる。その下には遙か遠く空との境目まで深く黒い森が広がっている。角を左に曲がると一直線の通路となった。いくら走っても終わりが見えない。胸の奥、肺に刺すような痛みを感じる。迫り来る地響きは山羊の喘ぐ声を掻き消し、ついに山羊の走る直線の真後ろまで迫ってきたのが感じられた。山羊は走り続けたまま素早く後方を振り返った。そして飛び跳ねるような恐怖が全身を貫いた。

山羊の背後には鋭い角と八本の足を持った巨大な蜘蛛のような機械が、鉄の鎧で全身

を覆った鬼の顔の巨人を乗せて、爆音と共に石の床を崩しながら猛烈な速度で山羊との距離を縮めていた。山羊は一目見た瞬間、その巨人と機械があまりにも山羊の背に近づいている事に驚いた。やがてそれらが近いのではなく、山羊の何倍もの大きさである事を知った。しかし迫り続けている事には変わりはない。銀色の蜘蛛が無数の足を絡ませる事なく床を貫き、引き抜く。その為蜘蛛の後ろの通路はただの石の残骸と化していた。上に立つ巨人は真つ赤に充血した怒りの目で山羊の貧弱な背中を捉えながら、鎖の伸びた巨大な鉄球を振り回している。頭上には赤黒い月が空に穴をあけている。その存在は、山羊の極めて純粹な恐怖を具現化していた。

『戦車』だ。山羊は怪物に対して咄嗟にそう思った。近代兵器ではなく、中世でそう呼ばれていた戦車だと思った。なぜ俺を追っているんだ。俺は何をしたんだ。全く心当たりがない。心当たりが無いのはこの場所にいる事も分らない。夢だ。間違いない悪夢だ。山羊は何度もそう考えたが、戦車の恐怖は一向に去る事もなく、夢から覚める事もなく、逃げ続けるしかなかった。遠くに通路の曲がり角が見えた。もう背後は怖くて振り返る事ができない。滝壺の側にいるような蜘蛛の激しい足音と巨人の発する意味不明

の叫び声がさらに近づく。突然、何かが背中(うしろ)に近づくのを感じた。そして次の瞬間山羊は、背中全面に重い衝撃を受け足が浮いた。巨人の鉄球だ。ついに鎖が届いたのだ。しかし鎖がぎりぎりの長さであったのと山羊が走り続けているお陰で、強く背中を押された程度に済んだ。通路には奇跡的に走りを崩さずに着地できた。直角の曲がり角を素早く左に折れると高い天井が現れ城内に入った。戦車はそのまま曲がり角に体当たりして動きを止めると、八本足を器用に入れ替えて向きを変え再び山羊への追跡を開始した。

城内に入った山羊は戦車から回避できる場所を探した。しかし通路はやはり一本道で枝分かれもしておらず、両脇や天井も長方形の大きな石で隙間なく壁が作られている。通路全体を激しく振動させ戦車が迫ってきている事を山羊に伝え続けている。山羊はやはり進み続けるしかない。体中の関節が外れ、ばらばらに散らばりそう(ばらばら)だ。もう限界だ。と思った直後、床石の隙間につま先を引っかけ、山羊は無様に前方に転んだ。受け身を取る力もなく右の頬を激しくぶつけた。もうだめだ。戦車に追いつかれ鉄球に叩き潰されてしまう。全身の力を振り絞って立ち上がるとゆっくりと足を交互に動かし歩いた。膝の骨の擦れる音が聞こえた。等間隔に蠟燭の明かりが付けられただけの薄暗い通路は

どこまでも続いている。戦車の振動に足をよろめかす。力を入れ顔を持ちあげると、通路の先に何者かの影が見えた。そう遠くはない。人間だ。山羊を助けに来たのか、それとも戦車と挟み撃ちで追いつめようとしているのか。いずれにしても山羊は足を進めるしかなかった。何者かは山羊の方を向いたまま、じっと佇たまたんでいる。戦車の破壊音が聞こえているはずなのに全く動こうとはしない。山羊は半はその者が戦車の仲間に違いないと思いつつも近づいて行った。もう顔がうつすらと確認できる。

「……シジン？」

山羊は呆気にとられて立ち止まった。何者かの顔は紛れもなくシジンそのものだった。ただその体は漆黒のローブのような一枚布で作った服に包まれ、頭には紺色をした三角形の帽子を載せていた。

「どうしてここに？」

目の前にまで近づいた山羊はシジンに問いかけた。高い三角帽子のせいで普段以上に背が高く見える。シジンはいつも通り焦点の定まらない目でじっと山羊の目を見つめ、やがて屈託のない笑顔を見せた。返事はなく、両端を持ち上げた口はきっちりとは結ばれ

ていた。

「何なんだ？ どうなっているんだ？」

山羊はずっと自分に問い掛け続けていた言葉をシジンにぶつけた。シジンはやはり口を開かない。楽しそうな笑顔を向けるだけだ。そうしている内にも戦車がどんどん迫りつつある事を山羊は背中で感じた。

「シジン、助けてくれ！ 戦車の怪物に追われているんだ。なぜかは分からない。でもこのままだと間違いなく二人共そいつに潰されてしまうぞー！」

山羊は必死で訴えた。シジンの悠々とした佇まいから、何か助かる方法があるのではないかと思った。何もなければ本当にここで終わりだ。シジンはそれでも何も答えないまま山羊の怒りと恐怖と懇願の入り交じった複雑な表情を楽しそうに見続けていたが、流れるような動作で右を向くと、壁を作っている大きな石の一つに手をかけ、軽く押した。するとその石だけがゆっくりと壁の奥に押し込まれ、壁の裏側の空間に落ちた。シジンは山羊を振り返って微笑むと、壁の穴に三角帽の頭を差し込み、全身を滑り込ませた。山羊はシジンの魔法のような行動に驚き、後に続いて穴に入った。穴は体を倒し、

腕を使って前進できる程度の幅と高さしかなく、巨大な戦車が侵入する事はまず不可能だった。山羊は肘をぶつけながらも体を先に進めた。やがて穴の先に造られた、四方を壁に覆われた小部屋に這い出た。シジンが手を差し伸べ山羊を立たせる。壁を隔てて徐々に戦車が近づいているのが聞こえる。山羊は恐怖に震えた。だが戦車は山羊達を通り抜けた穴に気付く事無く、八本足の壁を突き刺す音と巨人の絶える事のない叫び声を響かせて山羊のいない先を進み続け音を小さくさせていった。山羊は壁にもたれ掛かると、閉塞された小部屋の中で深く息を吐いた。助かった。澱んだ空気の中何度も深呼吸をした。それ以外の動作はしなくなかった。シジンは楽しそうに山羊を観察している。視線に気付いた山羊はやっとの事でシジンに微笑み返す事ができた。

「助かったよ」

どうしてシジンと共にこんな所にいるかはともかく、その事だけは変わりなさそうだった。戦車の音はもう聞こえなくなっていた。小部屋は暗く、少し湿っている。

「でも、どうしてここに？」

先程の質問を繰り返した。シジンはやはり無言のままだった。

「何で黙っているんだよ」

それでもシジンは困った表情をするだけだ。

「どうしたんだよ。何とか言えよー」

山羊が叫ぶとシジンは鼻から溜め息を吐いた。そして右手の人差し指で自分の口を示した。山羊がいぶかしげに注目すると、シジンはばかりと口を開いた。口の中には何もなかった。歯も舌もなく、暗黒の穴がどこまでも広がっている。山羊は驚いて何も答えられなかった。暗黒の奥には光り輝く小さな点がいくつも見える。星空のように思えた。右奥に楕円形の点の集まりが浮かんでいる。それは銀河だった。シジンの中に宇宙が入っている。山羊がそう気付いた瞬間、記憶はぶつっつりと途切れた。

八月二十五日

目が覚めてからもしばらく、山羊は現在の状況を把握する事ができなかった。テーブルから顔を上げ椅子に座り直す。テーブルには山羊の腕と吸い殻が山のように積まれた灰皿、隅にはビールの空き缶が十数本置かれ、トランプは数枚を残してほとんどが床に散らばっていた。やはり昨夜、シジンとのトランプゲームの後にそのまま眠ってしまった。シジンの姿はもう見えない。いつものように勝手に帰ってしまったのだろうが、山羊は先程までの悪夢もあって僅かに不安を覚えた。部屋の空気は、あの隠し部屋の中のように澱んでいる。窓を開けようと椅子から立ち上がる。しかし体が思うように動かず、再び腰を落としてしまった。身体中が疲労している。特に足全体に鈍い痛みを感じる。

一晩中走り続けていたから？ いや、椅子に座った状態で熟睡してしまったからだ。何とか立ち上がり、カーテンを開いて窓を開けた。新鮮な空気が部屋に入り込む。雨は既に止んでおり、空も徐々に白みは始めている。山羊はやっとの事で現実世界に戻れた気がした。

おかしな夢を見たなと思った。夢というものは大抵おかしなものだが、それにしても昨夜のは度が過ぎていた。あの恐怖の映像はいつまでも山羊の頭から離れず、戦車の地響きは耳の奥に余韻を残している。珍しく悪夢を観てしまった理由はなんとなく想像が付いた。昨夜はあまり強くない酒を飲んでしまい体が怠かった。そして椅子に座りテーブルに頭を置いた不自然な格好で眠ってしまった。体の方はもつと楽な体勢を望んでいたが酔った頭がそれよりも眠りを優先してしまい、お陰で辛い思いをしつつも目覚める事ができなかったのだ。それが悪夢となったに違いない。しかしその内容がさっぱり分からないものだった。夢であるならば山羊が現実世界のどこかで得た情報の寄せ集めでないかと納得できない。山羊はじっと考えた。中世の城はテレビや写真からであるつか。

戦車は、見覚えがない事もない。土台の八本足の機械はどこかのSF映画で見た事があるような気がする。上に乗る巨人はいわゆる日本の『鬼』に似ていた。その怪物に追いかけられるというのも、色々な冒険映画で登場するシーンだ。シジンの姿は昨夜から見続けていた。隠し部屋へ通じる仕掛けも、ありがちである気もする。分解していくと、なるほど全ての部分は山羊のこれまでの生涯で得た情報群だった。山羊の頭の中でバラバラであったそれらが夢の作用で無茶苦茶に結合され、山羊に、夢でありながら現実として現れた。そう、未だに気が晴れない原因は、あの夢が突拍子もないものでありながら、異様な説得力を持っていた事だ。あの夢の世界はどれも非現実的でありながら、何一つばやけた所がなかった。現実味を帯びた非現実。まるでこの本当の現実と壁一枚隔てた隣の現実。という所まで考えて、山羊は自分自身に苦笑いした。あまりにも馬鹿馬鹿しかった。

気怠いながらも会社に行き着いた山羊は自分の椅子に着席して深い息を吐くと、シジンに語った通り、『日々淡々と与えられる仕事をこなす』作業に取りかかった。それはい

わゆる校正業務だった。山羊の勤務する会社は、様々な業種の企業が発行する出版物の制作を行っている。出版物といっても雑誌や書籍といったものではなく、広告チラシや商品カタログ、社内報に町内会報、取扱説明書や同人誌といったものまで作っていた。山羊はその中で、文書の誤字脱字の訂正を赤色のボールペンで行い、段落の体裁を整える作業に携わっている。会社の制作作業のほとんどは今やパソコンを使って行われており、山羊が入社する以前まではよく見られた、ややこしい漢字の間違いや送りがないの間違いはほとんど見られなくなったが、代わりにワープロ入力ゆえのとんでもない漢字、例えば『私』を『渡し』としたり『君』を『黄身』といったものが多くなっていた。山羊はその一字一字をチェックし、国語辞典や漢字辞典で調べ、赤色のボールペンで校正記号を用いて訂正をする。左から流れてくる紙束の活字に細かく書き込み、右に流す。山羊は延々とその作業を続けていた。退屈と言えば退屈だが、シジンの言った通り、こなせられる仕事は耐えず左から与えられる。仕事に対する情熱や出世欲という面において、持つ必要があるのは分かっているながらも、なぜか根本的と言って良い程その欲望を欠如してしまっている山羊にとっては、悪くない仕事なのかも知れなかった。ただ自分

が社会の、大袈裟に言えば世界全体を動かすシステムの、極めて小さな部品の一つとして、様々な法律、制度、世間体、人間性、そして常識に縛られ、吊されて、身動きが思うようにとれないという窮屈感は常に感じ続けていた。そしてそこから脱出する術は、山羊には思い付かなかった。

『スガワラ電器株式会社 会社案内』

当社スガワラ電器株式会社は、昭和二十八年、大阪日本橋にて菅原電器商会として、『いつもお客様のそばに』をモットーに、家庭用電化製品の販売からスタートしました。当時電化製品は非常に高級なものとして扱われておりましたが、菅原電器は常にお客様の立場に立ち、日常生活において本当に必要とされるもの、より快適で便利、そして安心できる電化製品をご提供させていただく事のみを考え、独自の流通ルートを開拓し、信頼のおける製品のみを可能な限り安価で販売させて頂いておりました。昭和五十八年設立三十周年に伴い社名をスガワラ電器とし、本社を東京に移転しましたが、現在においても、いち大阪商人であった初代社長、故菅原源造の基本理念を守り続け……

『多用途型強力接着剤、マルチセメントZ』

接着可能なもの

紙、木材、プラスチック、鉄、布製品、革製品。

使用方法

接着する面の汚れを落とし、よく乾燥させてください。その後接着するものの両面に本溶剤を塗布し、付属のヘラを用いて均一に塗り伸ばしてください。その際、手や衣服に溶剤が付かないように十分注意してください。両面を貼り合わせ、約三十秒で固まり、約二分で完全に接着します。接着面のズレの補正はその間に行ってください……

「山羊君」

ふいに呼びかけられ、山羊は没頭していた校正作業を止めた。振り返ると中年の部長が紙束を抱えて立っているのが見えた。部長は山羊の事を本名の『八木』ではなく、『山

羊』と呼んだ。微妙なアクセントの違いだが、『山羊』と呼ぶのはジジンをはじめ学生時代の友人だけだ。恐らく部長が無意識にアクセントを間違えただけなのだろうが、なぜか山羊は気になった。

「手を止めてしまつてすまない」

部長は平然とした表情でそう言った。山羊は軽いいえと答えた。

「顔色が優れないようだ、どうかしたか？」

「ああ、そうでしょうか？ 昨夜友人と遅くまで飲んでおりましたので」

まさか怖い夢を観たなどとは言えなかった。血色の良い部長は僅かに笑った。

「君にしては珍しいな」

「そうですね。追加ですか？」

山羊は部長の紙束を見て、それから机の左側の紙束を整理しスペースを作った。部長は呻るような返事をして紙束をその場所に置いた。

「いつまで出来る？」

「急ぎですか？」

「若干な。明日の18時までなんだ」

山羊は机に積まれた未処理の紙の厚みと部長が運んできた新たな紙の厚みを合わせ、ざっと計算した。

「明日の昼過ぎまでにはなんとか」

「そうか。それじゃあ頼む」

部長は笑顔でそう言つと足早に去つて行った。こなせられる仕事がまた追加された。退屈だが日常業務となつてしまつていたので溜め息も出ない。窓を見るとビル群による灰色の海が広がり、遠くに真つ白な積乱雲が天に伸び上がっている。空はどこまでも青く、太陽は強烈な光を放つていた。冷房が完備されている室内に座る山羊の目には、現実の景色も夏の一風景写真にしか見えなかった。あの悪夢も視覚的にはこの景色のような位置にある。たまに外に出ればその燃えるような暑さと直射日光の刺激を肌を感じるが、今は壁一枚隔てた別世界にいる。それに気付いた時、自分の頭の中で悪夢が予想以上に近接している事に驚いた。振り切るように窓から目を落とすと、再び赤色のボールペンを手に、接着剤の説明書の校正に戻った。

『丸底フラスコの表面温度と大型海洋哺乳乳類』

山羊はふと手を止めると、その文章をじつと見つめた。訳が分からなかった。空が大分暗くなり始めた頃、ようやく部長から渡された分の作業に取りかかったが、最初の一枚目の中程にその一文が現れた。あまりに唐突に書かれているので活字の羅列に没頭していた山羊の目は、ちょうど道路に延々と敷かれたアスファルトの段差のある繋ぎ目につまずいたように我に返った。意味が分からない。そういう事は普段からある。大学教授の書いた論文や医学関係の出版物においては専門用語が多数登場するので、山羊ははじめから意味を知ろうとはしない。文章の意味が分からなくても文字の校正は可能だし、意味を理解した上で間違いはまた別の作業となり時間もかかってしまう。分からない部分は文章がきちんとしていればそれで良しとする。しかしこの言葉につまずいてしまったのは、その前後の文章と全く繋がりがなかった。そもそもこれは『主婦のた

めの節約手抜き料理集』というタイトルで書かれたものだ。『丸底フラスコ』、『表面温度』、『大型海洋哺乳乳類』との関係は全く見受けられないように思えた。念の為にそれまでの文章とその後の文章とを最後まで丹念に調べたが、やはりどこにもこの言葉に繋がる文章は発見できなかった。一体どうしてこんな一文が迷い込んできたのだろう。山羊はしばらく意味不明の活字を睨んだ後、赤色のボールペンで直線を重ねて打ち消し、余白まで線を引いて『トルツメ』と書いた。これで『丸底フラスコ』と『大型海洋哺乳乳類』の言葉は消され、その隙間は詰められる事になる。

『新食感炭焼板付蒲鉾制作風景』

ところがその次の仕事にも同じような一文が迷い込んでいた。今度はパソコンに取り付ける一部品の説明書だ。パソコンをあまり触らない山羊にとってはカタカナの多い全文に渡ってほとんど理解できない内容だったが、それでもいきなりカマボコの制作風景に関する言葉が使われるのはおかしい。しかし先に続いて二回続けて同じような問題が

見られるのは不思議だ。ワープロ入力をしている別の社員達のミスだろうか。しかしどういふ間違いでこのような事になるのだろう。

「個人主義と社会との矛盾する関係を保ちつつ双方共に発展させていこうという無茶な試みが当然のように推し薦められている為、結果双方共にバランスを崩しはじめています。それは『人を殺してはいけない』理由ですら考えなければならなくなり、しかも考えても思いつかなかつたりするという、生物として絶滅寸前の精神状態を保持し……」

ついに長文となって現れた。『月刊家庭菜園』という雑誌の『食欲の秋、おいしい自家製秋ナス』の記事に、もはや紛れ込むというよりは新たな段落として登場している。こうなるとどこまでを削除すべき箇所に当てるかの判断が困難になっていた。

「芸術は進化せず、ただそのあり方が変化するのみと言ったのはピカソだが、人の想像力というものは無限ではなく実は限りあるものであり、進化せずであり方のみを考える

だけでは現代ではどれもこれも出し尽くされた感がある。社会の発展に過去の事例を考える事が当然であるように、芸術においてもそのあり方のみ想像力を費やすのではなく、さらなる進化を産み出す想像力ではなく創造力を描くべきではないだろうか」

「無から有を生じ、有をさらに発展させ、しかしやがては無に帰するのが輪廻というものであります。同様にして西洋魔術で見かける星形、五芒星もまた、左下を出発点として底の状態から一気に天まで伸び、その勢い故に一旦は天罰として元通り底まで叩きつけられるが、それでも徐々に高みに登り、最も安定した位置を保ち続け、そして結局は出発地点まで落ちてしまう事を表しています」

山羊は気が付けば口元から笑みが零れていた。何が起こったというのだ。本来書かれるべき文章の中に全く別の文章が割り込み、混ざり合おうとしている。それにより両方の文章が破壊されている。活字同士が生物のように紙の上で食い合い、取り込み合い、殺し合っている。山羊は脇の下から滲む冷汗が流れるのを感じ、笑いながらも脅えた。

活字の羅列がどうしようもなく不気味に思えた。この作業でこんな感覚を受けたのは初めてだ。何かがおかしくなっている。しかし原因が分からない。山羊はそのまま紙束を引き裂きたいという衝動を抑えつつ、椅子を回転させて不気味な仕事を与えた部長の席を見た。部長は席に着いておらず、すでに退社してしまったかのように見えた。気が付けばもう遅い時間になっている。周りの席を眺めても数人の若い社員を除いてほとんどの社員が退社している。窓から見える空は既に真っ暗で、左側を二割程切り取られた、いびつな形をした月が黄色く光っていた。

八月二十六日

今朝も同じ時間に出勤し、同じ椅子に座り、同じ作業に取りかかっていた。昨日の続きであり明日への準備である。山羊にとつての今日は昨日と明日の繋ぎ目ではない。そしていつまで経っても今日しか訪れなかった。

昨夜の奇妙な文章の事は朝一番に部長に問い合わせたが、部長の方はわざわざ山羊が異常な部分を示しているにも拘わらず一向に山羊の訴えを理解できず、紙と山羊を見比べた後、

「いつも通り、訂正すれば良いんじゃないのか？」

と答えるだけだった。山羊の方も一夜明けて改めて読むと確かにそれ程怖いものでもな

さそつに思え、それならと若干部長への当てつけの気持ちを込めて、力強く赤色で訂正を加えた。山羊があつさりと引き下がったのは、元々の性格も大きい、それよりも昨夜は悪夢を観る事がなく気分良く目覚める事ができたからだ。あの後帰宅した山羊は、部屋のドアを開けるなり猛烈な疲れと眠気を感じ、素早く着替えを済ませるとそのままベッドに入り翌朝まで熟睡してしまった。悪夢の爪すらも感じなかった。シジンと連絡を取りたかったが、タイムカードを持たない彼が朝早くに目を覚ましている事は考えにくいので止めておいた。なによりも彼が、睡眠こそが詩人にとつて一番重要な創作活動だと信じており、人に起こされると手が付けられない程機嫌が悪くなる事も山羊は知っていた。

昼休みになると山羊は作業に一段落を着かせ、社員食堂に向かった。廊下の窓からは今日も真夏の太陽がコンクリートとアスファルトを溶かすかのように照りつけている風景写真が見える。非現実感はやはりしている。夏を暑いと感じる事が少なくなっている事が山羊に若干の不安を与えた。

社員食堂には会社の人間全員が集まるので昼休み時間だけは活気に溢れていた。山羊は見知った人間が通る度に簡単な挨拶をし、くだらない冗談に微笑んだりする。まるで自然災害による緊急避難時のテレビ中継でよく観る風景のように、皆一列に並んで食器を取り、食事の配給を受ける。大勢の人間が詰めかけているが与えられる食事の味に期待している者は誰一人としていない。カウンターの奥で動き回る料理人達が皆、和食は「ご飯、洋食はパン」という事を大前提でメニューを考えている。ここにもこなせられる仕事を与えられている者達が多くいる。山羊は数ある似通ったメニューの中から、和食の項目に含められているカレーを選択した。大きな横長テーブルの列を見渡し空席をいくつか確認する。その内の一つ、総務部の女性社員、レイコの前に着席する事に決めた。レイコは本当は陽子という名前だったが、山羊が知り合った時から周りの人間にはレイコと呼ばれていた。話をしている内にその受け答えの態度や立ち振る舞いによく言えば落ち着いた、悪く言えば華やかさに欠ける所から、レイコが『冷子』という意味で名付けられたのであろう事は容易に想像できた。年齢は山羊と同じで、肩にかかる手前で綺

麗に切り揃えられたショートヘア、そして少年のような顔つきと体つきをしている。中性的な雰囲気を漂わせている美人だと山羊は思っていた。総務部の他の女性達のように仕事以外の場所でも過剰に足並みを揃えようとする事に全く興味を持っていない所にも好意が持てた。

「こんにちは。席、良いかな？」

同じく愛嬌のない山羊は、できる限りの笑顔でレイコに声をかけた。レイコの方も冷めた表情を若干の営業的な笑顔に変えて、どうぞと静かに答えた。食事ははじめた所らしく、トレーに置かれたカレーはほとんど減っていなかった。山羊は自分も同じくカレーを選択した事が間違いではなかったと思った。

「カレーは美味しい？」

「まさか」

レイコは少しずつ、着実にカレーを食べている。上品な食べ方をしているのはカレーが服に着いてしまう事を怖れている訳ではなく、普段通りの動作だった。山羊も彼女に比べればやや粗く、しかし努めて上品にカレーをスプーンに掬い口に運んだ。予想通り

あまり美味しくはなかった。食べながらも時折レイコに注目している。綺麗である事には違いないのだが、その感情少なげな表情で相当損をしている気がした。山羊の方からいくらか冗談めいた話を投げかけたが反応も少なく、僅かに相槌を打つ程度に終わっていた。初対面の頃は嫌われているのかと思っただが、やがて彼女が誰に対しても同様の態度である事を知って安心した。但し彼女の場合、誰も彼も嫌っているという可能性も捨てきれないと思わせる、影のようなものを常に漂わせていた。

「相変わらず、落ち着いているね」

そう考え続けていたせいで、ふいに山羊がそう口に出すとレイコは、はじめは不思議そうに山羊の顔を見たが、やがて理解して、ようやく営業的な笑顔を止めて普通に笑った。

「そんな事無いよ」

「そうかなあ。いつ見ても冷静沈着な雰囲気を感ずるけど」

「山羊君程じゃないよ」

レイコの言葉が耳に入り、山羊は急に訳もなく浮かれていた気分から我に返った。自

分が冷静沈着だと思われていた事に驚いたのではない。『八木』ではなく『山羊』と呼ばれた事が気になった。昨日も部長からそう呼ばれた。冗談を伴わない普通の呼びかけで一体どうしたのだろう。それとも自分自身が気にし過ぎていただけなのだろうか。渾名が嫌なわけではない。以前初めてシジンからそう呼ばれた時は、周囲の笑い声もありあまり良い気分がしなかったが、慣れてしまつとシジンも馬鹿にしてそう呼んだわけでも無いので、どちらでも良く思えてしまふ。しかし呼ばれ慣れない人間達からそう呼ばれると随分違和感を抱いた。その感覚はやはり例の悪夢や窓から見える夏の風景、そして意味不明の言葉の羅列に似ていた。すんなりと馴染まない。流す事ができない。

「どうかした？」

黙ってしまった山羊に向かってレイコが尋ねた。山羊は少し戸惑った後、いや別に、とだけ短く答えた。そして何か気を紛らわそうとあちこちに目を走らせた。レイコの傍らにカバーのかかった文庫本が置かれている事を見つけた。

「それ、何の本？」

やはりできるだけ笑顔で山羊は尋ねた。それでも多少引きつっていたかも知れない。

レイコはああ、と言って文庫本を山羊に手渡した。

「ウィリアム・ブレイクの詩集」

やはり変わった人だと山羊は思った。社員食堂に詩集を持ち込む若い女性も珍しい。カレーを付けないように注意しながら文庫本のページを開いていく。原文である長方形の絵付きの詩文とその翻訳文が書かれていた。

「知ってる？」

「聞いた事はあるよ。読んだ事はないけど」

それは本当だった。もう何年も前だが、大学内の芝生に寝転がってシジンが読んでいたのを覚えている。隣で自分は何をしていたかは思い出せない。天気だけが陽気な、気怠い午後。風がやたらと清々しかった。読み終わってシジンは一言、悪くない、とだけ答えた。彼の使う評価の表現で、悪くないは最高評価だった。

「なかなか良いよ」

レイコの言葉を聞いて山羊は、その良いと言わせる所を探ろつとした。思ったより分かりやすい詩だ。回りくどくなく直接心の深い部分、久しく使う事も使う必要もなかつ

た極めて無垢な精神に響き、目覚めさせる。積もり続けた埃がさつと拭い去られる。元来詩を嗜む事のない山羊には、その感情がやたらと新鮮に感じられた。なぜそんな感情を抱いてしまうのかが分からない。書かれている詩はどれも曖昧で、とても心の深層にまで辿り着けそうには思えないのに。

「これはどうして読んでいるの？ 趣味？ それとも勉強？」

山羊はシジンの付き合いもあって、詩を読む人間の気持ちを知りたかった。レイコの方にしてみればその質問はおかしなものに思えたらしく、少し難しい顔をした。

「……両方かな」

「勉強もか」

これが何の勉強になるのだろうか。

「勉強して、何か分かった？」

「どうだろう？ 何か分かるのかな」

「勉強なんだから、何か分かるものなんじゃないの？」

「どうだろう？」

レイコは同じ答えを繰り返し、考えていた。

「どれだけ勉強しても、分かる事と言えば、どれ程分かっていないかって事だけじゃないのかな」

そう答えるとレイコは、カレーの入られていた食器を整えると、文庫本を小脇に抱えてすつと立ち上がった。

「戻るの？」

まだ昼休みの時間は多く残っていた。山羊はもう少し会話をしていたかった。レイコはあつさりと返事をして両手でトレーを持った。

「なんだか、このテーブルの番号が気にならなかった」

「番号？」

「どつして6番なんだろう」

山羊は長いテーブルの端に目を移した。確かにテーブルに付けられた小さなプレートには『6』と書かれていた。しかしそれは並べられたテーブル順番ではない。隣のテーブルは5番で反対側は7番だ。そして6番の何が気に入らないのが山羊には分から

ない。目を戻すともつ、レイコは山羊に背を向けて歩き出していた。山羊は小さく溜め息をついた。随分肩に力が入っていた事に気付いた。素っ気ないのは彼女の性分ではあるが、山羊にとつてはやはりどこか物足りなく、胸のあちこちに穴を空けられてそのまま放っておかれたような、細く、しかし深い虚無を感じた。こういう時に、詩でその虚無を埋めれば良いのだろうかと思つた。

八月二十七日

何かが、変わりはじめている。

その変化は、例えば朝に出かけて夜遅くに帰宅してみると、机の上にあつた小物が微妙にずれている気がする程度の変化だ。自分以外の人にとつてはとるに足らない事だが、本人にすればそれが非常に奇妙に思えてしまふ。だが多くの場合は本人の勘違いが多く、本当に何者かが侵入して小物だけ移動させるような事は無いはずだ。その程度の気味の悪い変化だつた。

発端は『戦車』の悪夢だつた。今朝も無事に夜を越せたにも拘わらず、その悪夢の気味悪さは一向に去る気配がない。それがきつかけとなつて仕事ではおかしな文章が気に

なり、それを不思議と思わない部長の態度に疑問を感じ、レイコの『6番が気に入らない』という発言が耳から離れない。急な坂を下ってしまい止まらなくなるとどこまでも加速する。精神に異常をきたすというのはこういう事なのかも知れない。自分がおかしいのか他人が間違っているのかが分からなくなるのだろう。自分はそこまで酷くはない。周囲の他人全員がおかしくなるはずはないのだから、自分が間違っているのだと冷静に判断できた。

しかし今日、その冷静さは一気に失われる事になった。

「……塔だ」

山羊は誰に言う事もなく、思わず呟いていた。

塔が建っていた。

会社の窓から見える無機質な灰色の海。そのずっと先に赤茶けた煉瓦を積み重ねた塔が、いや、塔らしきものがいきなり建造されていた。とてつもなく高い塔は途中、積乱雲に分断されながらも天高く伸びている。頂上は山羊の席からでは窓枠で切り取られて

しまふ為見る事ができない。理不尽な大きさだ。積乱雲で隠されているのだから、雲よりも向こう側に建っている。しかしその圧倒的な存在感が山羊の遠近感を麻痺させる。そして何よりも理解できなかったのは、これ程の建造物が昨日と今日の間、たった一晩で建てられている事だった。一体誰が、どんな方法で。息が詰まりそうになり慌てて窓から目を逸らし部屋を見渡す。驚いた事に、誰一人として驚いてはいなかった。窓際にいる者達でさえ塔には見向きもしない。塔ではなく仕事の事で騒がしく話し合い、歩き回っている。山羊は理由のない憤りを感じ思わず椅子から立ち上がった。

「塔だ！ 塔が建っているぞ！」

山羊は窓に向かって腕を伸ばし、塔に向かって指さして叫んだ。部屋の騒がしさが一斉に止まり、部屋で働くおよそ三十人の社員全員が山羊を見つめた。そして山羊が力強く示す窓の先、長大な塔を見ると、全く無関心のまま再び山羊の方に目を移し、ついに元通り仕事に戻って行った。山羊は一人、悠然と塔を指さしたまま動く事ができなかった。

「……山羊君？」

左から問いかけるように部長が話しかけてきた。山羊は腕を下げて部長の方を向く。目を合わせると部長は脅えたような表情をした。

「い、一体どうしたというんだ？」

部長は山羊が叫んだ理由が分からず、ただ戸惑っていた。

「どうしたって、あれが見えないんですか？」

一人で興奮している山羊は、もしやあの塔が他の人間には見えないのではないかと思っただ。そう思わせる程周囲は無関心だった。

「どれが？」

部長は目を細めて窓の外を見る。

「あの、塔が」

山羊は部長の横顔を見た。部長の大きな瞳にはちゃんと塔が入っている。部長は山羊の方を向くと、嘘臭い笑みを浮かべた。

「見えるも何も……」

「見えるんですね」

「あんなに大きいとね」

それを聞いて山羊は安心した。塔が自分だけにしか見えないとすればとても正常な精神を保っているとは言えない。だが部長はちゃんと塔が見えている。助かったと思った。

「それで、どうかしたのか？」

続く部長の言葉に絶句させられた。

「どうかって、いきなり塔が現れたんですよ！」

「だから？」

あの時と同じだと思った。理不尽な文章の校正について尋ねた時と。しかし今回の方が数倍奇妙だ。

「だから塔が！」

「山羊君」

部長は再び不安と脅えの入り交じった微笑みを見せ、そのままの笑顔を保ちつつ言葉を続けた。

「ちょっと落ち着きなさい。ね。少々疲れているみたいだね」

「いや、だって」

「ずっと細かい字を追いかけてくれているからね。私も一時やっていたがとも絶えられなかったよ」

部長は乾いた笑顔を見せている。山羊には彼が何を言い出したのか分からなかった。

「適当に休憩もとりなさい。仕事は多少遅れても構わないから」

「そうじゃない。塔ですよ」

「そう、塔だ。君は間違っていない」

「おかしく思わないんですか？」

山羊の言葉に部長は一瞬眉を動かした。おかしいのはお前じゃないのか？ と言いたげな表情だった。

「……大丈夫。後は僕に任せて良いから。今日は帰って休みなさい。ね。顔色が悪いよ」

山羊は本当に顔色が悪いのだろうと思った。誰も塔が見えていない訳ではない。誰もが見えている上で気にも留めていなかったのだ。部長を見る限りで言えば、塔に関する事以外はいつも通りだった。それがさらに山羊を不安にさせた。あれだけのものに何の

関心も示さないのはどういう事だ？ 何が起こっているんだ？ 半ば追い出されるように

に部屋を出た山羊は、深呼吸した後、廊下を歩き出した。なぜ不思議に思わない。僕はどうしたんだ。おかしくなってしまうている。皆が不思議に思わないのなら僕がおかしいに違いない。頭の隅々まで探したが、塔がいきなり建てられ、しかも誰も関心を示さないという現象の納得できる説明はどこにも見当たらなかった。何げに塔とは反対方向に開かれた廊下の窓を見て、山羊は思わず息を飲んだ。

そこにも別の塔が建てられていた。先程とは若干形の違いは見られるものの、やはり同じ煉瓦作りで、同じくらいの大きさがあった。山羊は激しく混乱していた。

「山羊君」

廊下を歩くレイコが山羊を呼んだ。青色のファイルを小脇に抱えている。山羊は慌てていつもの落ちつきを取り戻そうとした。しかしそれには無理があり過ぎてレイコに狼狽を読み取られてしまった。

「どっしたの？」

「……塔が建っているんだ」

「え？」

聞き返したレイコに山羊は戸惑った。

「塔だよ。さっき窓の向こうにあるのを発見したよ。それで廊下に出れば反対方向にも建っていたんで驚いたんだ。一体何本あるんだろう」

「16本でしょ」

レイコが即座に答えた。山羊は背中を突き抜ける不安、というよりは恐怖に近いものを感じた。

「16本？ そんなに？」

レイコは黙って頷いた。なぜ知らないのかという声が聞こえてきそうだった。

「あれは、何？」

「何って、塔じゃない」

「そうだけど。何の塔なの？」

「繁栄の塔」

「繁栄の塔？」

聞いた事がなかった。

「デパートか何かなの？」

「だから塔だって。どうしたの、山羊君。おかしいよ」

それは自分でもよく分かっていた。異常だ。自分がそんなのだろうか。周囲の人間全員が、そんな事はある得ない。しかも塔が建っているのは事実だ。世界がおかしいと考える事もまた異常だ。異常な世界。夢だろうか。これは悪夢の続きなのだろうか。そんな馬鹿な。落ち着け。冷静になれ。自分に言い聞かす。全然落ち着けない。

「の、登らせてくれるのかな？」

やっと出た山羊の言葉。それはレイコの端正な顔をさらに歪ませた。

「登ってどうするの？ ちょっと大丈夫？ 顔が真っ青だよ」

もはや顔色を気にかける余裕もない。

「早退すれば？ 調子良くないでしょ」

山羊は曖昧に頷いた。レイコは、気を付けてと念を押して、心配そうな表情をしつつ廊下を歩いて行った。山羊はふらつく足に力を込めて何とか会社の外へ出る。一気に高

まる気温が山羊の思考をさらに鈍くさせる。荒れた息づかいで天を仰ぐ。ビルの屋上から塔が伸びていた。信じられない程高く、いくつもの雲を突き抜け糸のように細くなつて青空に混じっている。繁栄の塔。宇宙にまで達しているのだろうか。その先はどんなっているのだろうか。込み上げる吐き気を抑え、ゆっくりと家の方角を歩く。帰ろう。帰って眠らなければ、それだけを考え続ける。眠れば現実である事を認めてしまう事に山羊は気付きもしなかった。

## 八月二十七日 夜

一目見てあの悪夢の続きである事は分かった。常に現実世界のすぐ側で広がっている、もう一つの現実。非現実でありながら酷く現実的である為に、脱出の方法が分からない。そんな事が考えられる夢なんてあるのだろうか。

山羊は城の中を歩いている。やはり粗末な服を着ており、足は素足だ。今回は追われていない事を直感的に知っている。体からは痛みも疲れも伝わらない。だが夢らしからぬしつかりとした感触はあった。壁に等間隔で取り付けられた蠟燭の暗い明かりのみを頼りに、ひんやりする石の廊下を歩く。高い天井を見上げる。高いと思われた天井は蠟燭の弱い光が伝わっていない為に見えないだけで、本当はあまり高くもなさそうだった。後

るを振り返る。蝋燭の光がどこまでも続いており、遠くの方でぶつりと途切れている。行き止まりなのか廊下が曲がっているのか、蝋燭が消えてどこまでも道が続いているのか判断できない。鼻から深く息を吸い込む。少しカビ臭い。静かに耳を澄ます。通路を歩く山羊の裸足の足音以外は何の音も聞こえない。立ち止まり五感を駆使して全神経を集中させたが、何の気配も感じない。息を潜めて待ちかまえているという予感もない。完全に一人だ。だが夢である事を知っているせい、それを恐ろしいとは思わなかった。

ここは、どこなのだろう。どこでもないのだろう、夢なのだから。山羊の作り出した想像の城であるはずだ。だが山羊自身城がどのような大きさで、どういう形なのかが分からない。夢はそういうものなのだろう。夢に違いない。それだけは確信を持って言える気がする。では現実とは？ 山羊は昼の出来事を思い出す。16本の繁栄の塔。それを気に留めようともしない会社の人々。異常を訴えれば理解されなまま早退させられた。あれが現実なのか？ 理解できないのに？ あれも夢なのか？ 自分は二重で夢を観ているのか？ 自分が知っている現実はどこへ行ったのだろう。そもそもそんな現実はあるのだろうか。

城の内部は恐ろしく複雑で、無数の交差点と階段によって計り知れない広がりを見せていた。枝分かれの度に山羊は、迷う事なく道を選んで進む。適当に選んでいる。迷うべき目的地がどこであるかも知らない。やがて壁の蝋燭の感覚が狭くなり、燭台の装飾が精緻になる。何枚もの扉を開ける度に廊下の幅が広くなり、見上げると天井から蝋燭のシャンデリアが下がり、足下には柔らかい赤絨毯が素足を温めてくれるようになった。山羊は道の間違えてはいないのだと思った。なぜ間違っていないかも分からないのに。歩いている内に人の気配が感じられてくる。だがそれは通路の装飾が派手になった事により、人がいてもおかしくはないという程度の予感だった。

ドアを開けると再び長い通路が伸びている。その奥の方に人影が見えた。シジンだった。以前にも一度会っているのではや驚きもしない。何が起ころうとも、誰と出会っても不思議でない方が夢らしい。山羊を見つめているシジンは、以前と同じ黒いローブを被り、頭には紺色の三角帽子を載せ、なぜか厳しい顔をしている。

「シジン。やっぱり君もいたのか」

現実世界で会わないままに、夢の世界ではもう二度出会った事になる。山羊が現実世

界で何とかシジンと連絡を取らなければと思いつけている証拠なのだろう。山羊はシジンに声を掛けてから、彼がこちらの世界では喋れない事を思い出した。前回の夢では彼の口には歯も舌も何もなく、宇宙が広がっていた。

神聖なる王城に羊が迷い込んでいる

そう思っていた山羊に反してシジンは、はっきりと口を利いた。口の中には宇宙はなく、普通の白い歯と赤い舌が覗いている。

羊よ どこへ行く

草などもう どこにもありはしない

流れるような口調でシジンは言った。

「どうしたんだ？ 俺は羊じゃなくて山羊なんだろ？」

なぜ羊と山羊を分けたのだ

なぜ羊のみを慈しみ

なぜ山羊を高山へと追いやったのだ

我は知っている

分別という行為を教えたかったのだ

細分化を示したのだ

お陰で世界はどうなった

シジンは舞つように廊下を歩く。その口からは詩が語られる。山羊は久しぶりにシジンの詩を聞いた。現実世界ではいくら頼んでも滅多に詠ってはくれなかった。だが折角詠ってくれたここでは、それどころではない。

「シジン。何なんだよ」

我は魔術師  
死の使い  
扉を開ける  
詩の使い

シジンは詩を止めようとはしない。そこで山羊は、彼が詩を止めないのではなく、詩を用いてでしか言葉を発する事ができないのではないかと思った。

羊よ お前は魔術の中にある

シジンは大きな目で山羊を見た。その瞳には異様な力を宿している。

扉を開けて謁見せよ

皇帝と女帝に謁見せよ

皇帝と女帝に上奏せよ  
分別するなと上奏せよ

シジンの詩は直接的で山羊にも理解し易い。先の扉の向こうには、この城の皇帝と女帝がいるのだらう。皇帝と女帝が同時にいるのもおかしい事だが、夢なのだからそれを追求しても仕方がない。山羊はシジンに向かって、黙って頷いた。会わなければならぬのだらう。会わなければ夢から出られない気がする。羊と山羊の分別は別にどうでも良かった。

我について来るが良い  
健気について来ると良い  
我の魔術に惑うが良い  
お前だけしかないのだから  
せめていい子でいるが良い

シジンはそう詠うと、ふらついた足取りで通路の奥へと進んだ。山羊もその後ろに従う。やがて目の前に、やたらと派手な扉が現れた。相当大きく、重量もありそうだ。あの戦車の鬼ならともかく、山羊とシジンだけでは動かす事すらできないのではないかと思えた。シジンは扉に右手の平を当て力を入れた。やはり扉はびくともしない。山羊も手伝わつてもり扉に近づき触れようとしたが、シジンの左手がそれを制した。

扉を開け

心よ開け

その美しき水の流れは

雨となって浄化せよ

気高き皇帝よ

美しき女帝よ

かの悲しき水の澱みに

混じり合つて浄化せよ

シジンが大きな声で詠った。すると今まで堅固に閉じられていた扉が、シジンによって音もなく僅かに奥に押し開かれ、ちょうど人間一人が通れる程の隙間ができた。隙間からはさらに強い光が漏れている。シジンは軽く山羊を促した後、扉の奥へと消えて行った。山羊も緊張を抑えながら扉をくぐった。

一際大きな部屋は強い光に包まれていた。四方の壁が、太い柱の一本一本が、その内側から光を放っている。足下は通路から続いた赤い絨毯が伸び、その左右には汚れ一つない白い絨毯が広がっている。高い天井一面に、空と雲と、神々が描かれている。見上げる山羊は、現実世界のどこかの国の美術館を思い出した。

奥では段を上り、二人の男女が椅子に腰掛けていた。山羊から見ると左側が皇帝で、右側が女帝だ。大きい。あの戦車の鬼と同じ位の大きさだ。この世界の人間は皆これ位大きいのだろうか。皇帝は、山羊が漠然と想像していた、頭に王冠を載せ、白い髭を伸ば

し、太った体に煌びやかな服を纏まとった者とは全くかけ離れていた。王冠の無い頭は長い金髪を後ろに流している。白い顔は白人の俳優のように整っている。だが、非常に冷酷な表情をしている。青年のような体には大小様々な装飾を付けた漆黒のローブを緩やかに纏い、長い足を組んでいる。若く、皇帝というよりは貴公子といった感じだ。隣の女帝も若く、非の打ち所がない程美しい顔をしている。髪はやはり金色で、長く伸ばされてはいる。顔つきはどことなく会社のレイコに似ている気がした。しかし無表情なレイコと違い、女帝は全てを慈しむような、優しい微笑みを常に携えている。皇帝と似たような形のローブを着ているが、こちらの色は純白で、裾は足の先が見えない程大きく広がっていた。山羊は二人の持つ存在感のようなものに圧倒され、呆然と立ち尽くしている。これは人間だろうか。神という者達ではないだろうかと考えた。座っている二人から力の波が押し寄せてくる。戦車のような暴力的な、腕力の強さではなく、それこそ神と人間のような次元の違う強さだ。自分がとても小さく小さな存在に思える。絶望に近い無力感が体を満たした。絶対に逆らってはいけない気がする。隣では魔術師のシジンが、片膝について頭を深く下げている。シジンは以前、自分は絶対の真理を得た者でな

ければ決して頭を下げないと言った事がある。事実山羊は彼が挨拶以外で頭を下げた所を見た事がない。以前まで山羊は彼のその意地のようなものが非常に格好良いと思えていたが、結局その戒めのせいで彼は仕事に就けないのではないかと最近はやがて考えた。そのシジンが今、頭を下げ続けている。皇帝とは、女帝とは、絶対的真理を得ているのだろうか。山羊は立ち尽くしたまま、どうすれば良いのか迷った。同じように片膝をつけて頭を下げなければならぬのだろうか。きつかけが掴めないまま時間が過ぎてゆく。皇帝は明らかに山羊を見下した、冷酷な表情のまま、僅かに口を開いた。

「ひかえよ」

静かな、しかし恐ろしく威厳の籠もった声が部屋に響いた。およそ皇帝の風貌からは想像がつかない、深く、重い声だ。その口から絶対的な言葉しか発せられないはずだ。山羊は全身の力が抜けその場に臥せてしまった。両手を付き、額を床に押しつける。土下座だ。皇帝の顔を見る事さえ許されない。隣のシジンと比べると随分惨めな格好だ。しかしいくら腕に力を入れても床に吸い取られてしまつようにちっとも動けない。背中に漬物石を置かれたように動けない。

「よく来た。歓迎はしないが謁見は許可しよう」

皇帝は全く感情の籠もらない声で話した。恐らく顔も冷酷な無表情のままだろうが、平伏している山羊には観る事ができない。

「酷い姿だな。見るに耐えん」

吐き捨てるような声が聞こえる。山羊は、うう、と言葉にならない呻り声を上げた。これ程緊張しているのは生まれて初めてだ。怖い。逆らえない。昔の殿様の前に土下座する農夫の気持ちとは、こういふものだったのだらうかと思っただ。争う前から定められている完全なる敗北。

「哀れな羊。そのままでは辛いでしよう。顔を上げなさい」

別の方向から暖かい声が聞こえた。皇帝と同じように静かな、だが優しい声だ。山羊の緊張が解けた。全身が弛緩し、横に倒れてしまいそうになる。ゆっくりと力を入れてなんとか顔を起こし、赤絨毯の上に正座する事ができた。皇帝はやはり冷ややかに、山羊という物体を見ている。女帝は山羊と目が合うと、ゆっくりと微笑んだ。やり過ぎではなく、形式的でもない、全てを認めてくれる微笑みだ。山羊は泣いてしまいそうにな

った。

「情けない顔をするな」

皇帝が山羊を一喝した。山羊は身震いをしたが、女帝のお陰で再び崩れ落ちる事はなかった。横にいたシジンが片膝をついたまま、下げていた顔を静かに起こした。

夢幻の深淵に住まう皇帝よ

悔り給わぬよう

か細き一匹の羊にも

使命をもって生を受ける

その小さき姿

含まれる脆弱な精神にも

「黙れ、羊飼」

皇帝の声が部屋に反響する。シジンは口を嚙み再び頭を下げた。口答えは許されない。

山羊は父親の姿を思い浮かべた。山羊自身の父親ではない。一世代古い、父性をいびつに具現化させた父親の姿。

「ここは、どこなのですか？」

山羊は思いきつて女帝に尋ねた。皇帝には尋ねる事ができない。女帝は緩やかな笑みを携えたまま、小さく口を開いた。

「ここは、法皇によって分けられた世界です」

まるで子供に諭すような口調で女帝は答えた。法皇とは何なのだろう。

「法皇は節制と共に世界を造り変えようとはしました。もう随分前の事です。そこで、必要な存在と不必要な存在とを分けたのです。本当は分けられるものではありません。分けた事にしたのです」

山羊にはよく分からなかった。法皇とは皇帝や女帝よりも上にいる者なのだろうか。分けられたもう一つの世界。法皇と節制が席巻している世界とは、山羊のいる現実世界の事だろうか。

「法皇とは、あなた方よりも強い力を持っているのですか？ あなた方は法皇に追いや

られてしまったのですか？」

山羊が尋ねると、皇帝の冷酷な表情が、さらに厳しく残忍な顔になった。

「愚者が。言葉に気を付けろ」

怒ってもいない、強くもない、だが皇帝の一言で山羊は腰を抜かした。真剣に、心の底から、殺されると思った。

「我らに強いも弱いもあるものか。法皇が我の諫めも聞かずに愚かにも実行しただけだ。法と節度、それだけを基盤にしてな。お陰でどうなった？」

「べ、どうなったのですか？」

皇帝は嘲るような笑みを浮かべた。

「貴様だ。貴様が出来上がった。手足を縛られ身動きができぬままに吊されている。藻掻く事すらままならん。自力で死ぬ事もできん、無力な羊だ」

貴様と呼ばれたのは生まれて初めてだ。山羊は反論できなかった。皇帝に口答えのできる立場で無い事も分かっているが、反論する言葉が見当たらなかった。法皇の話はやはり分からない。しかし山羊を表現した言葉は、非常に的確に思えた。納得し難い社会

の規範、世間の常識に縛られ、日々淡々と与えられた仕事をこなしている。諦めに近いものがある。気に入らない気がするだけで、本当に気に入らないのか、どうなれば気に入るのかも分からない。皆は分かっているのだろうか。歳を取れば、分かるのだろうか。分かったようなつもりにさせられているのではないだろうか？ 法皇と節制の力だろうか？ そして、それを決して悪とは思えない、それでも良しとする自分がいる。あれが法皇と節制の支配する世界だろうか？

「羊よ。この世界はどうだ？」

ややあつて機嫌を直した、と思われる皇帝が山羊に尋ねた。

「……前は、大変でした」

「ほう？」

「何だか怪物というか戦車というか、そういうのにずっと追い掛けられていました。でも危うく潰されそうになる所を、シジンに救って貰いました」

我は羊を導く

誰が彼を見捨てられようか  
自身を見失った  
悲しき羊  
疲れた羊よ  
背後の恐怖におののき  
前方の道の単調さに絶望する  
左右の草はいよいよ青く  
けれども羊の目には前後しか映らず

詩人が詠う。

「あの戦車はなんなのですか？ どうして俺を追うんですか？」

山羊の問いかけに、女帝は小さく笑い声を上げた。

「あなたが法皇と節制の世界から来たので、戦車に追い掛けられるのです」

「戦車は、もう一つの世界から来た者を追い掛けるのですか？」

「そうではない。もう一つの世界から来たものは追いつけられないのだ」  
皇帝が訂正した。

「どう違うのですか？」

「全く違う。追いつける戦車に意思は存在しない。追いつけられる貴様の意思があるだけだ」

「……分からない」

「貴様の世界よりは分かり易いだろう。節制に支配されたお前達は気付かぬままに、巧妙に追いつけられているのだから」

「何に追いつけられているのだろう。そういえばいつも何かに追いつけられている気がする。仕事、時間、そして自分自身に。走り続けなければならない。立ち止まって休んでいる時も、本当は立ち止まっても、休んでもいない。そんな山羊自身の思いが、あの戦車を産み出したのだろうか。ではこの城は」

「これは、夢なのでしょう？」

山羊は思いきって尋ねた。いい加減にして欲しかった。早く夢から覚めたかった。皇

帝は山羊に失望したような、呆れたような表情をした。

「そうだ。貴様の言葉で表現するならば、夢だ」

「では、シジンもあなた達も、俺が作り出した事になるんですか？」

「その羊飼いはそうだろうが、我らは違う」

「おかしいじゃないですか。これは俺の観ている夢なのでしょう。俺の記憶の断片なのでしょう？」

夢の中で夢の事を言っている。だが一向に目覚める気配はない。

「貴様の夢だが貴様のものではない。法皇と節制に縛られた者は何もかも乱暴に区別してしまっただな」

「分かりません。全然分かりません」

山羊は頭を抱え込んだ。現実世界とこの世界が根本的に何かが違う事は分かった。だがそれを理解する事ができない。理解できれば、現実に戻れそうだが。

「すぐに分かる」

皇帝は天井を見た。瞳に天井壁画の鮮やかな空の色が映る。

「我らもそちらに行く事にした」

「そちら？ 現実世界ですか？」

皇帝は山羊の方を向かず、現実、と呟いた。残忍な笑みが漏れる。

「法皇と節制があくまでも我らを拒み、これ以上の醜態を晒すというのなら、力づくにでも侵入し、もう一度完成させるしかなかるう」

山羊は僅かに震えた。この皇帝の力がどれ程のものだろう。いや、どのような力なのだろう。

「どうなってしまうのですか？」

「どうにもならん。我らはな。お前にしてみればとてつもない事かもしれないが」

皇帝は山羊に向かってニヤリと笑った。山羊は吹き飛ばされそうな力を感じ、正座した両膝に力が入る。動いてもいないのに息切れがしている。

「恐ろしいか？」

山羊は二三度、たて続けに頷いた。

「言っておくが、侵入を提案したのは我ではないぞ。こちらの女帝だ」

皇帝が緩やかに手を動かして示すと、女帝はゆっくりと頷いた。

「これ以上あなたが、何も知らないままに法皇と節制の言いなりになり続けているのはとても観ていられません」

女帝はやはり優しく、強く言った。この世界が、現実世界に侵入する。一体どうやって。その瞬間、山羊は現実世界の変化を思い出した。

「……塔が建っていた。とても大きな、16本の塔が。いきなり建っていたんです」

「そついう事だ。崩れる運命にある繁栄の塔が出現し始めた」

皇帝が言った。やはりあの塔はこちらの世界のものだったのだ。もう侵入は始まっている。

夜が明ける

皇帝と女帝との謁見が開ける

扉が閉じる

無垢な瞳に瞼が閉じる

羊飼いと呼ばれていた魔術師のシジンが詠った。途端に山羊は激しい眠気に襲われる。眠っているのに、夢の世界なのに、異常に眠い。皇帝と女帝の姿がぼやける。山羊は絶えきれなくなり、柔らかい赤絨毯に顔を埋めた。

次に気が付くと山羊は現実世界に戻っていた。限りない安心感と脱力感、そして拭いようのない不安に、山羊は涙を流した。

八月二十八日

皇帝達の侵入を示す16本の繁栄の塔が八月の太陽の強烈な光を受け、都市に一直線に伸びる影を作っていた。やはり誰も不思議に思っていない。昨夜の山羊のように、既に皇帝の説明を受けていたのだろうか。だから気にならないのだろうか。いや皆が知っているのなら、もっと騒ぎ立てるに違いない。山羊はぼんやりと会社の椅子に座っている。仕事は相変わらず流れてくるが、その中身はもはや校正のしよつが無い程に乱れている。原文が見つけられない。時折紛れ込む白紙にも何か意味があるのではないかと思ひ、延々と眺めている。裏返したり、日に透かしたり。やはり何も映らない。それでも右隅に『校正ズミ』と書いて束ねておく。ただの白紙を捨てる自信すら、もう山羊の

精神には残されてはいなかった。訳もなく脅えている。ちらちらと辺りを窺い、時折素早く振り返る。自分の見えない所で、会社の皆が、机が、椅子が、コンピュータが、全く別のものになっているのではないかと思えてしまう。まるで小さな子供だ。夜、目を瞑ると、世界が変わってしまふ気がする。黒い天井の形が昼間とは違う気がする。襖の隙間から漏れる明かりがやたらと眩しく、小さな話し声になって仕方がない。この世界の何もかもが不安で、自分自身でさえあやふやだった少年時代。あれから何が変わったのだろうか。法皇の既成観念が叩き付けるように大量に埋め込まれただけではないだろうか。

狂っていると思った。

世界ではなく、他人ではなく、山羊自身がおかしくなっている。と、山羊自身が思った。なぜ自分だけがこれ程理解に苦しんでいる。なぜ他人は一向に頼着しない。特別な能力、選ばれし者。そんな考えは大嫌いだ。世界が、他人全員が狂っているわけがない。

自分自身が狂っているのだ。皇帝、女帝、魔術師、戦車。夢相手に何を真剣になっていく。塔は、塔は建った。それだけだ。自分の知らない、画期的な建築方法によって建てられたのだ。不思議でもなんでもない。このビルだって住んでいるマンションだって、どうやって建てるか知らないじゃないか。知らない事ばかりなんだ。それで良いんだ。俺は、狂人だ。認めなければならぬ。だがそれに気付いている分、まだいくらか救いようがあるはずだ。今度病院に行こう。正直に話して治療してもらおう。近頃は俺みたいな人も多いらしいじゃないか。恥じゃない。疲れているんだ。法皇と節制に縛られて。いや、おかしな夢ばかり観るからだ。帰りに薬局に行つて睡眠薬を買おう。睡眠薬ってすんなり買えたか？ じゃあ風邪薬でも頭痛薬でも良い。ちょっと多めに飲めばぐっすり眠れるはずだ。そうしよう。

仕事時間が終わり山羊は会社から外へ出た。街が随分明るいと思いき空を仰ぐと、紺色の空を突き抜ける塔の隣に温度の持たない満月が煌々と輝いていた。夢の事とそれから脱出方法を始終考えてしまつていた為か仕事は遅々として進まず、山羊は遅い時刻に

退社する事になってしまった。残念な事にもう薬局は閉まっている。明日は会社を休もう。そして病院へ行こう。どうせ会社では自分は既に半ば狂人扱いされてしまっているのだ。休んで病院に行くと言えば、ひよっとすると皆も安心してくれるかも知れない。山羊はそんな事を考えながら帰り道を歩いていた。青白く光る街並みは山羊を訳もなく不安にさせる。ネオンの輝く看板と赤く照らす焼鳥屋の提灯が、何とか山羊の正気を支えてくれる。道の端で腰を下ろす不良少年達の睨みを避け、薄着の女性を目で追い掛ける。片隅に辻占がいる。華奢な机に白い布を掛け、小さな老人が椅子に腰掛けている。後ろの壁には紙に書かれた『占』の一文字。机の角に置かれた白い三角錘に、『西洋占術』と書かれている。山羊は通り掛かり、ちらりと机の上を覗き、そのまま通り過ぎようとして、突然足を止めた。机の上に散らばったカードを凝視する。

「占いますか？」

占い師は噎れた声で丁寧に言った。それでも山羊はカードの一枚から目を離す事ができなかった。

「占いますか？」

再び占い師が問いかける。

「戦車だ」

山羊はやつとの事で見当違いの返事をした。カードには八本足の機械の上に乗る、鬼のような怪物が描かれている。その上には『7』の数字が書かれている。

「ああ、戦車ですね。まあお座りなさい」

「いや、俺は」

「お座りなさい」

老人の占い師は皺に埋もれた瞳で山羊を見つめた。山羊は黙って席に着いた。背後で通りがかる人々が、ちらちらと振り返っているのが感じられた。

「これは、戦車か？」

「そうです」

これは一体どついつ事なのだろう。あの恐ろしい戦車がカードになってしまっている。

「他も、観ても良いか？」

占い師は、どつぞと短く答えた。山羊は裏返ったカードを開ける。カードにはそれぞれ

れ違った絵と番号が振られている。これが西洋占術の道具なのだろう。

「皇帝だ」

絵となっているのでその迫力は感じられないが、描かれている姿は間違いない昨日出会った皇帝の肖像画だった。番号は4。次々と開けていくと、今度は女帝のカードが現れた。番号は3。1番のカードには、紺色のローブに三角帽を頭に載せた魔術師が描かれていた。ただその顔はシジンとは似ても似つかない男だった。そして、

「塔だ！」

塔のカードも存在していた。16の番号が振られている。16本の塔。山羊の観た夢の世界がカードに記されている。これも、このカードも侵入の一つなのだろうか。向こうの世界からもたらされた物なのだろうか。

「タロットカードをご存知ですか？」

占い師は山羊の狼狽に驚きもせず問い掛けた。

「タロットカード？ いや、知らない。これはそう呼ぶのか？」

占い師は、はいとだけ答えて、山羊の崩したカードを皺だらけの手で撫で回した。

「西洋占術の道具です。21までの番号、それに0を加えた22枚のカードで構成された大アルカナと、こちらの56枚の小アルカナによって占います」

枯れ木のような手が脇におかれたカードの束を掴み、山羊に差し出した。小アルカナと呼ばれるものは棍棒、剣、金貨、聖杯の4種類に分かれたカードに、それぞれ14番までの数字がふられている。

「トランプみたいだ」

「トランプの起源ですよ。発祥時代や場所は未だにはっきりしていませんが、随分昔から受け継がれています。そして棍棒はクラブ、剣はスペード、金貨はダイヤ、聖杯はハートとなり、それぞれ一枚減った13枚になったのがトランプなのです」

説明を聞きながら山羊は、シジンと行ったトランプゲームの事を思い出した。シジンは、タロットカードを知っているのだろうか。

「これで、何が占えるんだ？」

「何もかもです」

「何もかも？」

占い師はゆっくりと頷いた。

「これらのカードには、この世の全てが象徴されています。言い換えれば、この世の一切は、これだけのカードで収まってしまうのですよ。」

山羊は机の上のカードをじっと見つめた。5の番号を持つカードには西洋魔術でよく見る星形、五芒星が黒い線で描かれた、白く高い帽子を被り、同じく白を基本とした装飾の多いローブを着た男が収められている。皇帝とよく似ているが、その目からは、冷酷、残忍、そして父性といった感情を持たない、完全に冷静な光が宿っている。皇帝のように山羊を侮らず、山羊の髪の毛一本まで管理し、見えない糸で縛り上げようとする。山羊はこれが法皇だと直感的に悟った。他のカードから離れ、節制と共にこの世界を操っている見えない支配者。

「まるで御存知ないようですが、なぜ戦車や皇帝を知っておられたのですか？」

占い師が囁くように尋ねた。山羊は法皇のカードを裏返してから、顔を上げた。

「夢を観たんだ。このタロットカードの絵とそっくりなのが現れる夢を。」

山羊が答えると占い師の小さな目が僅かに輝き、元に戻った。

「分かりますよ。よくある事です。」

「戦車に追い掛けられたんだ。」

「今の人は、絶えず追われています。戦車が追い掛けたのでなく、あなたが戦車に追われているでしょう。」

「皇帝も、そんな事を言った。」

「誤りを見過ごせないのも皇帝です。」

「あの塔は？ あそここの塔はこの塔とそっくりじゃないか？」

山羊は月の逆光を浴びる漆黒の塔を指さした。占い師も少し顔を上げた。

「そのようですね。」

「あなたは、おかしいと思わないのか？」

「珍しいですね。」

占い師はそう答えた。さして驚いているわけでもないが、普通と違ってしている事は理解している。

「あれはどついつ事なんだ？ なぜ誰も気に掛けようとしななんだ？」

「流されているですよ」

「流される？」

占い師は頷いた。

「大きな力が運命の輪を回します。人々は常にその中を流れていきます」

「それは、輪廻つて奴か？」

「そんな大きなものでなくてもです。あなたはこれらのカードを具体的な姿で観たようですが、本来は目に見えないまま一人一人に影響を及ぼすものなのです。22枚の大アルカナに56枚の小アルカナ。78枚のカードを皆さん持つておられます。笑ったり、泣いたり、前向きになったり、落ち込んだり、その度にカードの力関係が変わります」

「シジンが、友人が魔術師の格好をしていた」

「それは夢の事ですか？」

「もちろん」

「ならばそのご友人は魔術師の力を大きく持つておられたのでしょうか」

「……確かに、魔術師みたいな奴だ」

「確定はできません。ご友人も流されているのです。愚者のような振る舞いをみせたり、恋人のように愛おしく思わせる事もあるでしょう。時には悪魔となって皇帝の力を見せるかも知れません」

老人はそう言う子供のように無邪気に微笑んだ。山羊は話の途中から付いていけなくなっていた。言っている事は分かるが素直に納得はし難い。誤魔化されているような気がする。曖昧過ぎる。直感で、脳の奥底で感じとらなければならぬのだろうか。まるで詩のようだと思った。頭を持ち上げ夜空を見上げる。視界の端に塔が見えた。

「みんな流されているから、塔を不思議と思わないというのは、どういう事だ？」

「法皇の力です。あの塔を異常と感じないように節制で縛り、運命の輪を回しているのです。もう補いきれなくなっていますが」

「補いきれていない？」

「あなたの夢の世界と、こちらの世界との融合が始まっています。あの異常な塔はその象徴です。法皇の力を超える、もっと巨大な力によって運命の輪は回されました。法皇と節制によって縛られた現実<sup>かぐはみ</sup>は審判によって破壊され、あなたの夢と攪拌<sup>かくはん</sup>されます」

「あなたは、どうしてそれを知っているんだ？　なぜ塔を不思議に思うんだ。向こうの世界の奴なのか？」

「私はずっと以前から流れる事を止め、人の運命を映した鏡に徹する事にしています。だからこのまま、隠者の姿のまま、何物にも動かされずにいられます」

占い師がカードを差し出した。9番。そこには占い師そっくりの老人の姿が描かれている。

「俺は、俺もそつなのか？」

「違います」

「じゃあ、なぜ俺だけが流れていないんだ？」

「あなたも止まっています。しかし隠者ではありません。傍観者として、いや、あらゆる象徴をその身に受け続ける役割を持っています」

「分からない」

「分かります」

「はつきり答えてくれ。俺がおかしいのか？　それとも皆が、世界がおかしいのか？」

山羊の問い掛けに、占い師は呆れたような表情をした。

「あなたが世界なのですよ」

目の前にカードが差し出された。21番。最後のカード。そこにははつきりと、齧える山羊自身の顔が大きく描かれていた。いや、そつではない。そのカードだけ全面に鏡のように反射する銀紙が貼られている。実際の山羊の顔が映っているだけだ。

「ぶざけるなよ」

山羊は占い師の手ごとカードを払った。カードは月光を受けて煌めきアスファルトの地面に舞い降りた。

「俺はそんなじゃない！　世界だなんて、そんな立派な奴じゃない」

「そつでしようか？」

「俺は普通の男だ。大勢の他人と同じだ。世界なんかじゃない」

老人は山羊の言葉を無視して地面に落ちたカードに手を伸ばす。ぎりぎりまで手が届かない。すると別の方向から手が伸び、世界のカードを掬い取った。

「山羊の目から見える世界は、全て山羊だけのものだ。耳から聞こえる世界も山羊だけ

のものだ。影響を受けるのも、与えるのも君の世界だ」

背後から声が掛けられた。振り向くと、ぼさぼさ頭で大作りの顔をした長身の男が立っている。手には、地面に落ちた世界のカードを持っている。

「シジン」

「路上で占いを受けていて夢のような事を真剣に語っている。誰かと思えば君だったんで驚いた。いやはや君もなかなかの詩人だ」

シジンは山羊の目の前で世界のカードを揺らし、驚いた山羊の顔を揺らした後、テーブルに戻した。

「聞いていたのか？」

「気にしないで、続けて」

シジンが一步下がる。夢の魔術師とは違い、いつも通りの親しみが感じられる。変人だと思っていたシジンがやけに普通の人間に思える。これでは自分の方が変人だ。山羊は大きく溜め息をついた。

「帰ろう」

「なんだ、つまらん」

山羊は椅子から立ち上がると、占い師に規定料金を惜しげもなく出した。金の事を考える気にもなれない。

「普段の占いはできませんでしたが、お役に立てましたか？」

占い師はポケットに金をしまつと散らかったタロットカードを集め始めた。山羊は何も答えないまま占い師に背を向け、軽くシジンを促して立ち去った。占い師はやはり感情を示さず、黙ってカードを束ねる。最後に世界のカードを一番上に乗せた。一息ついて顔を上げる。細長い塔と、満月が見えた。

「シジンと呼ばれていたな。落ちた世界を拾ったのは」

隠者は閉じた口の中で呟いた。

「夢を観たんだ」

山羊が言った。大通りから離れ路地の奥へと進むと街の喧噪は随分遠のき、呟き声でも十分響いた。

「聞いていた」

シジンは山羊の隣を歩きながら答えた。紺色のシャツを着ている。もちろんロープではない。下は黒いズボンを穿いていた。

「シジンも夢を観たか？」

「夢を観るのも詩人の仕事の一つだ」

「そうじゃなくて、俺と同じ夢を観たか」

「観ない」

シジンはあっさりと否定した。

「そうか。そりゃそうだよな」

「でも山羊の話はよく分かる」

「分かる？」

「夢を別の世界、もう一つの現実だとしている事」

「本気か？」

「もちろん」

「夢は現実じゃない、脳の中の世界だろ」

「この現実だつて脳の中の世界とは言い切れない。それを解明する方法は僕達には絶対に産み出せない。僕達も世界の一部だから」

「そんな話はよくあるな」

「昔からみんな感じていたんだ。自分の存在があやふやなのが嫌だから、絶対の真理を求めようとする」

「屁理屈だ」

「そう考えるのがきつと一番正しい」

「でもこの頃は自信がない」

「そうだろう」

「……皇帝が言つには、」

「うん」

「こんな話は嫌か？」

「山羊から聞かされるとは思わなかったけど、そんな話は大好きだ」

「……皇帝が言うには、元はこの現実と夢の現実は一つだったが、法皇と節制が勝手に現実を分けて、こっちの現実を支配するようになったらしい。夢の現実も夢として追いやられたそうさ」

「それはごく最近の事なんだろうな」

「そうか？」

「昔はもっと夢を重要視していたんだ。何かの予兆とか、啓示として受け取っていた。もちろんその頃からこっちとあっちは完全に区別されていたけど、とりあえず丈夫な橋は掛かっていた」

「今じゃ夢を啓示として受け取るのは宗教くらいだな」

「それでもみんな重要と感じているんだけど、法皇が何かがそれを許さなかったんだろう。だからみんな自分の観た夢には一定の敬意は表しているながら、人の観る夢は馬鹿にするんだ」

「そうだな」

「万人共通の思いが不思議と社会じゃ通じない」

「みんな夢の事言い出したらこの世界は成り立たない」

「成り立たないと思っ込んでる。それがニーチェのせいかフロイトのせいかはともかく。一旦夢を夢と扱いだした時から大部分の人間が、そういう事にしたんだ。人間は群を作る本能だから大多数には絶対に逆らえない。夢を夢と扱わない人間は改心するか仮面を付けるか、でなければ抹殺されるんだ。世代が変われば完全に捨てさせられる」

「それでも捨て切れないのは？」

「それが真実だから」

「その真実がもつすぐこっちにやっけて来るらしい」

「ほっ。どつなるんだい？」

「どつにもならないらしい。でも俺にしてみれば、とんでもない事が起こるそうさ」

「それは楽しみだな」

「……俺は狂ったのか？」

「山羊が狂ったのなら、僕も狂っているんだろう」

「もっ、何が現実なのかも分からない」

「今まで分かっていたんだ」

「足下が酷く不安定だ」

「やっと僕と話が合いそうだ」

「シジンはそれを待っていたのか？」

「そんなに暇じゃない」

「……俺はそっちに行きたくない。君と話が合うなんてまっぴらだ」

「じゃあそうしろよ」

「……塔があるだろ」

「何？」

「向こうに、理不尽に高い塔が」

「あるな」

「あれは、どう思う」

「格好良いな」

「おかしいと思わないか？ 皇帝はあれも、こっちとあっちの繋がりが深まった一ツだ

と言ったんだ。誰も不思議に思わないから、俺もそんな気がしてしまう」

「うん」

「シジンはどう思っている？ 俺に合わせなくて良いから正直に答えてくれ。あれは、

おかしくないか？」

「どう答えたら山羊は満足するんだ？」

「どうって」

「僕がおかしいと答えてもおかしくないと答えても、同じ事じゃないのか？ どうして

僕の意見を聞くつもりなんだ？」

「それは」

「それは山羊が群を探しているからだ。君自身が納得するしなは関係ないんだろ。今はどうしても群の考えに納得できないから不安なんだ。例え一人でも、意見が合う奴を求めているんだ。本当は狂ってはいよつが狂ってしまいが関係ないんだ。孤立しているのが怖いんだ」

「俺は真実を知りたいだけだ！」

「そんなもの無いよ」

「そんなはず無いだろ！」

「無い。あるとすれば群の大きい方が真実だ」

「……そんなもの、納得できない」

「だから夢の現実がこつちに来るんだよ」

道は二つに分かれていた。片方を進めば山羊のマンションに行く。もう一方に行けばシジンの住処に行ける。シジンは足を止めた。今日はここで別れるつもりなのだ。まさか怖いから泊まりに来てくれとは言えない。明滅する外灯に二匹の蛾が舞っている。「分らない」

山羊にはもはや理解不可能である事が分かっていた。

「俺は、どうすれば良いんだ」

「何もしなくて良い」

シジンが即座に答えた。外灯の明滅に合わせて目の光も激しく点滅する。

「山羊は世界なんだろ。なら、ただ成り行きを見守っていれば良いんだ」

「……何が出来るわけでもないだろうしな」

「そついう事だ」

シジンはそついうと軽く手を挙げて山羊に背を向けた。いつも通りの別れ、しかし山羊にはもう二度と会えない気がしていた。

「シジン」

山羊が思わず声を掛けた。シジンは待っていたかのように、踵でくるりと回転した。

「夢を観たと言っていたな」

「言ったよ。僕は毎晩夢を観ている。実を言うと今も早く帰って眠りたいんだ」

「どんな夢を観た？」

「聞きたいのか？」

「教えてくれ」

この状況。あくまでも山羊だけの非常事態かも知れないが、そんな時に詩人の観る夢が知りたかった。啓示を受けたかった。シジンはしばらく黙って、山羊の目を見つめて

いたが、やがて軽く息を吐いて答えた。

「……ラッパを吹く夢だ」

「ラッパ？」

「そつ。トランペットなのかどうか僕は詳しく知らないけど、とにかくラッパだ。それを吹いていた」

シジンは真剣な顔で答えていた。山羊は思わぬ肩すかしを食らい、笑ってしまった。

「人の夢を笑うな。聞きたいと言ったのは君だ」

「悪い。ラッパなんて吹けるのか？」

「ああ、とても上手に吹けた」

シジンも笑って答えた。

「それは良かった」

「残念だったか？」

シジンは片方の眉を上げて山羊を見た。

「何か、自分に関係した夢を観てくれているんじゃないかと思っただら？」

「……まあな。シジンはその夢をどう理解した？」

「別に。早いとこラッパを手に入れないとなと思っただよ」

二人の笑い声が、青白く静かな街に響いた。

八月二十八日 夜

山羊は眠れなかった。

薄暗い照明が灯る狭い部屋。中央に置かれたテーブルに向かって椅子に腰掛ける山羊は、延々とトランプを並べていた。時折外から聞こえる、自動車の騒音以外は何も音が無い。山羊は、テーブルの中央に置かれた山からトランプを一枚引くと、左隅から順に、ゆっくりと並べ続ける。

ダイヤの6

スペードの3

スペードの7

クラブの10

眠れば夢を観る。深い森に包まれた巨大な城、もう一つの現実。

ハートの2

ダイヤの9

ダイヤの1

ハートの12

女帝により始められた夢の侵入。

クラブの5

スペードの8

ハートの5

スペードの13

皇帝により引き起こされる現実の完成。

クラブの3

スペードの11

クラブの1

ダイヤの13

法皇と節制の支配は破られる。しかし、それ程酷いものだったのだろうか？

ハートの7

ダイヤの11

スペードの1

クラブの11

俺はどうなる？ どうする？ 選ぶのか、選ばされるのか？

山羊は並べ続ける。それが重要な意味を持っているわけではない。何かをしていないと落ち着かない。眠ってしまう恐れはないが、何かをしていないと、大変な事になる気がする。だが山羊には何もできず、トランプを並べ続けている。山羊は焦っている。トランプを並び終えてしまう。その前に、次に行く事を考えておかないといけない。何をしよう。何ができる。テレビを観る訳にはいかない。意味不明な番組が流されるのが怖い。こんな事になるんだったら、ジグソーパズルでも買っておけば良かった。5000

ピース位の、大きな物を。もうトランプが終わってしまう。なぜこんなに早く並べてしまったんだ。もっとゆっくり置いていけば良かった。止められない。止めればもう二度と再開できない。時間が止まれば良いのに。そう、俺は時間を止めたかったんだ。明日はもっと大変な事になるはずだ。だから、明日になる前に時間が止まれば。馬鹿馬鹿しい。

スペードの4

ハートの3

ダイヤの7

ジョーカー

まるでこの為に設計したかのように、机には隙間無くトランプが埋まった。最後はジョーカーだった。並べ始める前からそんな気はしていた。どうしよう、終わってしまった。山羊は大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。それを三回繰り返し返した。気持ちが悪く、本当は少しも落ち着いてはいないが、落ち着かせた事にさせた。椅子から立ち上がり、窓際に向かう。窓は厚手のカーテンに覆われているので外の景色が窺えない。

い。山羊はカーテンの端を掴み、もう一度大きく深呼吸をすると、一気に開けた。マンションの12階、深夜の暗い空にネオンの光が映える。見下ろすとさすがにもう人の姿は見えないが、マツチ箱のような車が通り抜けて行く。やはり遠くには塔がそびえ立っているが、それ以外の問題は見当たらない。山羊は安堵の息を吐く。街の景色にこれ程安心させられるとは思わなかった。山羊は椅子を窓際に寄せて腰掛けた。トランプなんて並べていないで、もっと早くからこうしていれば良かったと思った。街に変化が起こってもすぐに分かる。朝起きて、街の様子が変わり変わってしまっていたら、恐怖のあまり失神してしまうかも知れない。このまま見続けていけば、たとえ変化が起こっても、まだ気持ちに余裕が産み出されるだろう。山羊はそう考えた。

街はこの窓からは見えない満月の輝きによって、青白く照らされている。昼間、塵と埃に汚され、むせかえるような生活臭を漂わせていた街が、夜になるといつの間にも浄化され、高貴な雰囲気包まれてどこまでも広がっていた。街のこんな姿はいつから観ていなかっただろうか。占い師は、人間もタロットカードのように次々と入れ替わって生きていっていると聞いていたが、もしかすると街も、次々にその様相を変えていくのではない

だろうか。発展ではなくその性格のようなものが。事実、今の街には人の匂いが感じられず、人間を全て排除したかのような神秘的な表情を見せている。そう、夢の現実がやって来ようと来まいと、街には普段からこういう性格も持っていたのだ。それとも、夜になると法皇の支配が緩んでしまうのか。すると皇帝が侵入するとすれば、より夢と現実が近づいているこの夜ではないだろうか。山羊はじっと目を凝らし、街の隅々を点検する。まだ問題ない。

どうしてこんな事になってしまったのだろうか。どうして俺は、徹夜で街の様子を窺っていないなければならないのだろうか。そうせずにはいられないのは、なぜだろう。気持ちばかりが焦っている。俺は気が触れたのだ。だから夢の事が気になって、たまたまできた巨大な塔に恐怖している。気が触れてもこんな風に冷静な感情が持てる者がいるのだろうか。いや、感情の中の冷静な一部分だ。大部分は不安、恐怖、そして焦燥が頭の中を埋め尽くし、首筋を通して体全体に流れ込み、手足の末端まで満たしている。右足の嫌らしい貧乏揺すりが止まらなったり、蠅のように絶えず手を擦り合わせているのはそのためだ。なぜ俺一人が。いや、俺一人だからこそ、これ程恐怖しているのだ。シジン

の言う通り、俺は単に同調してくれる味方を求めているだけだ。今日のシジンはやけに尊大で、俺の心を見透かしたように振る舞っていた。きっとシジンの中の皇帝が力を持っていたに違いない。

明るい空に僅かな星が明滅している。広大な宇宙に輝く、極めて小さな一点。この星だってそうだ。そしてこの星のさらに小さな一点、宇宙を一つの生命体と捉えるならば、その組織、細胞、遺伝子よりもまだ小さいのが俺という存在だ。それが、明日の事が不安で、トランプを並べたり、自分の存在している周辺をじっと窺っている。馬鹿みいだ。そう思うと少し気が落ち着いた。良いぞ。夢の現実が侵入しようとして、法皇と節制の支配が解かれようと、宇宙にしてみれば微々たるものだ。起こった事さえ気付かれないのだ。星を観ている内に徐々に気持ちが悪くなり、微少な存在である事を知った上の、開き直りの強さが腹の奥から沸き上がってきた。皇帝との謁見の場もこれ位の度胸で臨めば良かった。どうしてあんなに、土下座までして、情けない態度をとったのだろう。今なら皇帝にだって反論できるはずだ。雄弁に語り、皇帝の侵入を思い留まらせる事だ。できてきたかも知れない。山羊は星の瞬きに合わせてしきりに頷いた。しかしそれが、

開き直りの空元気である事に気付くまでには、そう長い時間は掛からなかった。

空に変化が訪れた。山羊に自信と希望を与えた星々が、まるで消灯したかのように掻き消されていく。山羊の視界の左端から何か巨大な存在が現れた。それは月だった。満月。一面に黄色い光を放ちつつ、ゆっくりと視界の中央に向かって移動している。一瞬、山羊の背中に元の不安が通り抜けた。ただの月だ。しかしあれ程大きなものだったか。あんなに冷たい光を放つものだったか。恐ろしく巨大で、眩しい。それは神秘を通り越した、禍々しい存在に感じられた。あんなに重そうな物体が空に浮かんでいる事が酷く奇妙で、不気味だった。山羊は元通り手を擦り合わせる。これが現実だ。シジンは、俺の見える世界は、全て俺のものだと言った。俺の世界だ。そこに非現実な存在がある。なぜ今まで気にならなかったのだろう。あんなものが浮かんでいる世界こそ、恐怖以外なものでもない。塔が理不尽であるなら、満月もまた理不尽だ。俺の世界が、俺の全てだ。宇宙とはまた別の世界だ。法皇と節制が誤魔化していたのだ。俺の視界を無理矢理広げさせて、細かい所を見えなくさせていたに違いない。月は山羊を嘲笑つかのように、ゆらゆらと動いている。山羊はその様子を、瞼を大きく開いて凝視する。目を閉じ

なければいけない。だが目を閉じるともつと、とてつもない変化を起こすかも知れない。目を閉じて月を消せば、漠然とした恐怖でもう二度と開ける事は叶わない。額から頬にかけて粘り気のある汗が流れる。喉が干上がっている。落ち着け。山羊は荒れる息の中間、水分を得ている間に、何かが発生すればどうするのだ。あの満月以上の何かが。しかし、何が発生するのは皆目検討も付かない。それがまた恐怖となって山羊に襲いかかる。手足だけを激しく動かし、けれども視線は揺るがせない。

やがて月は高度を低下させ、山羊の目からは街に墜落する寸前で、視界の右側に消えていった。耳を集中させ、満月が墜落する衝撃音を捉えようとする。何も聞こえず、騒がしくなりはじめた人々の生活音が街に響いている。今は何時だろう。山羊は部屋の奥に掛かっている時計を確かめようとする。固定された視界を解放する寸前で、再び目が動かなくなった。何かがやってくる。街の遙か遠くから、やや視界の左端から、今度は下から迫り上がってくる。朝日だ。強大な熱と光を持った、最強の存在がついに姿を現す。全生命体の命の源。それが計り知れなく暴力的に感じられた。満月が嫌らしい、精

神的な不安を与え続ける存在ならば、太陽はより肉体的に、直接的な破壊力をもった存在だ。異常に干上がった喉の奥から微かに囁かれた声が漏れた。山羊はその自分自身の怪物のような呻き声にも驚いた。太陽に殺される。夜の街に溜まった夢の欠片を、その記憶も含めて一つ残らず焼き尽くす。支配のための浄化作用、いや整地作業だ。今までこうして夢の侵入を防いでいたのだ。そして16本の繁栄の塔は、灰に変えられない程現実と混じり合ってしまった。そう考えた瞬間、別の恐怖が山羊の脳裏から発生した。俺は、現実なのか？ それとも夢なのか？ 夢だったら太陽に焼かれ灰になってしまっ。何とかしなければ。しかし山羊が対策を練るより早く、太陽から放たれた最初の直射日光が、異常に大きく開かれた山羊の目に直撃し、脳を貫通し、後頭部から突き抜けた。山羊は首を仰げ反り、微かに身を震わせると、椅子ごとぐらりと後ろに倒れた。

八月二十九日

山羊は目が覚めてからも、しばらくは動く事ができなかった。霞む目で正面の壁を見つめる。いつも寝ている場所とは違ったが、どうやら自分の部屋だ。ゆっくりと体を持ち上げる。ふくらはぎが、すぐ側で倒れている椅子に触れた。後頭部に鈍い痛みが走った。それ以上に目がしみる。充血しているようだ。熟睡したというのに。と、そこで山羊は昨夜の出来事を思い出した。しまった。眠ってしまった。慌てて立ち上がる。体中の関節が軋んだ。しばらく正面の白い壁を見つめる。右側には街の風景が広がっているはずだ。どうなっているのだろう。右目の端が街の色彩を感じている。深呼吸して、気持ち落ち着ける。一、二の三で振り返るか。いや、そういうのがいけない。もっと気

楽に。どうなっているにしても冷静に受け止められるように。もう一度、深呼吸。そして少し笑う。あははっ。よし。山羊は気軽に、しかし明らかにぎこちなく窓に目を移した。

何も、変わっていない。

溜め息を一つ。

街は呆れる程何も変わっていないかった。昨日観ていた夜の風景は、そのまま昼に移行している。灰色のビルが建ち並び、マッチ箱の自動車が通っている。驚いた事と言えば、空がやたらと澄んでいる事ぐらいだった。どこまでも広がる青い空。遠くには純白の積乱雲の大きな固まりが浮かんでいる。

山羊は床に座り込み、しばらくその青空を眺めていた。眩しさに目がしみて少し涙が流れた。そして訳もなく笑った。今度は心の底から笑った。助かった。山羊が一晩中監視していたから、皇帝が侵入を思い留まったのか、法皇が頑なに拒んだのか、とにかく助かった。笑い続ける。助かったと言えるかどうかは分からない。もしかすると、山

羊には束縛から逸脱できる最大の機会だったのかも知れない。しかし山羊はそれを恐怖と感じた。山羊のみの逸脱なら選べる気にもなれたかも知れないが、世界そのものの逸脱は耐えられなかった。笑いすぎて少し咳き込んだ。しかし明日になればまた、どうなっているか分からない。いずれ決着を付けなければ、壁掛け時計を見る。もう昼を回っている。会社は完全に遅刻している。山羊は手早く支度を済ませると部屋を出た。会社は休んで病院に行く事にした。

繁栄の塔は未だそびえ立ち、天空に焦げ茶色の一本線を引いていた。外は想像以上に蒸し暑い。まだ八月だ。もうすぐ九月になる。何も起こらなければ。歩道の中央で時折立ち止まり、辺りを見回す。やたらと天気が良いせいか、それこそ周囲の風景が晴れやかに感じられる。自分だけが何やら汚れた存在のように思えた。通り過ぎる人々は足早に山羊を避けて行く。恐らくおかしな人間のように思われているのだろう。それは認めよう。だから病院へ向かっているのだ。

歩く内にやがて、なかなか前方に進みづらくなっている事に気付いた。どうしたのだ

ろ。人通りが激しいので、やたらとぶつかる。流れに逆らっているのだ。横にずれて、山羊と同じ進行方向の流れを探す。しかしどこまで行っても、山羊とは反対方向の流れしかない。少し背伸びをして周囲を窺う。そこで山羊以外の全ての人間が、山羊とは逆に進んでいる事が分かった。どうしたのだろう。反対方向に駅でもあっただろうか。思い出せない。有名人のコンサートか、何かイベントでも行われていたのだろうか。それでも山羊と同じ流れが全くないのは不思議だ。山羊は通りすぎる人の一人、できるだけ誠実そうに、スーツを着た仕事中心と思われる若い男に声を掛けた。

「ちよつと、すみません」

男は立ち止まり、山羊を見た。黒縁の小さな眼鏡を掛けている。

「何？」

「何か、あったのですか？」

「何の事？」

「周りの人がみんな、向こうへ向かっているようなのですが」

山羊の言葉に男はああ、と小さく答えた。

「多分、墜落地を見に行くんじゃないかな？」

「墜落地？」

男は再び、ああと答える。

「昨日の夜に落ちたからね。珍しいから俺も今から見物に行くんだ」

「どうやらこの流れは、何かが墜落した場所へ向かう野次馬の集団であるらしい。歩いて行くならそう遠くはないはずだ。一体何が落ちたのだろう。飛行場も近くには無く飛行機の通り道でも無いから、個人所有のセスナ機やヘリコプターかも知れない。まさかUFOって事もないだろう。」

「何が落ちたんですか？」

「あれ、知らないの？」

男は眼鏡の奥の目を大きくさせた。そういえば山羊は昨日一晩中起きていた。何かが墜落したならその音や、それが聞こえなくても、周囲は騒がしくなるはずだ。そんな出来事は無かった。

「ええ、知らないんですよ。隕石ですか？」

隕石と答えたのは、あまりにも人々がそちらに向かっていている事でそう思ったからだ。余程珍しいものでないとこうはいかないだろう。男は山羊の答えに、そうだと頷いた。だがその後すぐに、いや、と言い直した。

「違う。隕石じゃないだろう」

「じゃあ、何ですか？」

「満月だよ」

山羊はしばらく男の言葉の意味が分からなかった。何かの比喩だと思った。

「それは、どういう事ですか？」

「どうもこうも、そういう事だよ」

「満月が、落ちたんですか？ 月って、落ちるんですか？」

「だから珍しいって言ったじゃないか。もう良いかな？」

男は山羊の返事も聞かずに立ち去った。山羊は昨夜の事を思い出す。窓の左側から現れた巨大な満月は、山羊に不安と恐怖を与えつつ、街に触れる寸前で右側に消えた。あれは、あのまま本当に落ちたのだ。そう考えると、満月がやたらと大きかったのも頷け

る。しかしそんな事はあるのだろうか。山羊は直射日光を浴びているせいか、首筋に小さな針で刺すような痛みを感じた。後頭部も痛む。その奥は泥沼のように澱んでいる。月が、やって来たのか？ タロットカードに月の象徴があるかどうかは知らないが、月もまた太陽に代わって夜を支配している。もう一つの世界のものかも知れない。非常識的な現象。山羊は迷った。迷うまでもない事だったが、それでも迷いたかった。やがて方向を一回転させ、周囲の流れに乗って足を運んだ。やはり確認しないといけない。

町が丸ごとひとつ無くなっていた。

ぎゅうぎゅう詰めに都市開発されたこの国に、果たして『隣町』という概念が存在するのかどうかは分からないが、山羊の住む町から少し外れたもう一つの町、電化製品店の激戦区とされていた場所が、跡形もなく消え去っていた。足下のすぐ側は崖になり、そこから広大なクレーターが作られている。周辺を取り囲む人々が物珍しそうに見物している。しかし結局はただの穴でしかないのです、すぐに飽きてめいめい立ち去って行く。

にわかカメラマン達のシャッター音が、風に流され山羊の耳に届いていた。

山羊もぼんやりとクレーターの中心を見つめる。どうやら本当に満月が墜落したようだ。ではもう夜に月が現れる事はないのだろうか。もうすぐ秋が来る。お月見はどうなるのだろう。ぼんやりとそんな事を考えていた。どうでも良い事を考えてしまうのは、それ以上の疑問点が未処理のまま脳内に転がされているせいだった。

月にしては、小さ過ぎた。月の大きさがどれ位かは山羊は知らなかったが、まさか隣町一つで済むわけではないだろう。宇宙から墜落したのだ。それなのにこの程度のクレーターしかできていないという事は、墜落したものはもっと小さかったに違いない。さらに昨夜は地震も、衝撃音も、何も聞こえなかった。これだけは自信がある。あれだけ集中して間違い探しを行っていたのは生まれて初めてだ。トラックの音にも脅えていた自分が、月の墜落に気が付かないわけがない。これはどういう事だ。考えるまでも無かった。夢の現実が侵入したのだ。音もなく小さな満月を落として都市を消し去るなど常識では行えない。とりあえず見物に来ている人々も、それ以上の関心を示さない。法皇の抑制が働いている。山羊は前歯で強く下唇を噛んでいた。舌先に血の味が感じられる。

終わっていない。まだ、終わっていない。

「山羊君じゃないか」

突然声を掛けられた山羊は慌てて後方を振り返った。そこには血色の良い顔の部長が立っていた。

「君も来ていたか」

部長はどれどれと山羊の後方のクレーターを眺め、何やら感心していた。山羊が会社を無断欠勤している事には全く触れようとしぬい。

「すごいねえ。満月が落ちると」

「……本当に月でしょうか？」

「そうらしいじゃないか」

部長はやはり疑問一つ浮かべずに答える。

「月って、こんなに小さいものじゃないでしょうか？」

「いやあ、こんなものだろう」

「そんな訳ないじゃないですか」

「だって君、月を観た事あるだろう？」

「ありますよ。そりゃあ」

「どう観たってせいぜいこんなもんだろう」

部長はそう言うのと、右手の親指と人差し指で小さな隙間を作った。3センチあるかないか。それが月の大きさだと言っている。

「それは、部長の目で観た大きさじゃないですか」

「……他にどの大きさがあるんだ？」

「違いますよ。月はもつと遠くにあるんですよ」

「ああそうか。じゃあこれくらいか」

今度は親指と中指で、月の大きさを示した。

「すごいねえ。こんなものでも、宇宙から落ちてくるとこんなに大きな穴をあけちゃうんだもんなあ」

違つ。何もかも違つ。月も部長も違っている。これが法皇と節制の支配か。山羊は激しい吐き気を覚えた。事態は山羊の見えない所で大きく進行していた。支配が崩れ始め

ている。皇帝は侵入の為に、可能な限り理不尽な現象を起こし、現実を歪ませている。法皇はそれに対抗すべく、力づくで支配力を強めている。山羊は、世界は、その影響をそのまま受け続けている。全身が震える。山羊はじっとしていらなくなり、滑稽なまでに狂わされている部長を押し退け、クレーターから遠ざかった。

「面白いものは見られたか？」

山羊の顔を悠々と横切る小さな黒猫が、振り向いてそう尋ねた。山羊はその事を驚くよりも、その小さな体からは想像できない程重く、力強い声、そして焼けた石のように内部から溢れ出す巨大な力に驚き、黒猫の正体を容易に見抜く事ができた。

「皇帝……」

漂わせている空気は間違いなく、夢の世界の支配者のものだった。

「そつだ。何とか侵入は果たせた」

黒猫は確かに、にやりと笑った。見下ろしている山羊は、自分でもなぜそうしたのか分からないが、思わずしゃがみ込んだ。しかしそれでも、黒猫より高い目線にある。そ

れが耐えられない。とうとう山羊は道路に這いつくばり、黒猫より低い目線を保つようになった。そうせずにはいられなかった。

「どうして、そんな姿に」

「この姿が一番、二つの世界を移動しやすいからだ」

黒猫は愛嬌のつもりか、細長い尻尾を揺らしたが、山羊には不気味さ以外なものもなかった。手の平に太陽に焼かれたアスファルトの熱を感じながら固まったままの山羊を見つめ、皇帝はさらに口を開いた。

「満月の墜落を見たか？」

「墜落地は、見ました」

「素晴らしいだろ」

道行く人々が黒猫と、その前で這いつくばる山羊を見下ろし、去って行く。

「法皇には会われましたか？」

「我々に形など存在しない。この世界を埋め尽くし縛り上げているもの全てが、法皇と節制だ」

「でもあなたはその姿を持っているじゃないですか」

「この姿も、以前お前と会った時の姿も現実ではない。皇帝という力の固まりだ」

「皇帝も女帝も、戦車も、全ての人々の心にあると聞きました」

「そういう事だ。それもまた法皇と節制によって大いに抑制されている」

「俺は、どうなんですか？」

「お前は世界だ」

「なぜ俺だけが違うんですか？」

「お前の世界だからだ」

「それが分らないんです」

「それでは他に、何を分かっているのだ？」

皇帝に問い質され、山羊は言葉に詰まった。分かる事が、もはや何一つ無かった。

「羊よ」

皇帝の呼び掛けに山羊は顔を上げた。皇帝は蔑むように山羊を見下ろしている。その背後の青空に幾筋もの光が流れている。白昼の流星雨だった。大量の流星が空を突き抜

けて、墜落し続けている。衝撃音が鳴り響いている。

「侵入はもう止められない。これが我らの正義だ」

遠くから地響きが伝わった。流星とは別に、工事現場の側のような音が近くから聞こえ、徐々に山羊の元に近づいている。コンクリートを削り取る低音の深淵と、高音の頂上が入り交じった音。山羊には聞き覚えがあった。しかしそれはこの世界の音ではない。体を持ち上げ、ゆっくりと振り返った。

遠くの方から銀色に輝く八本足の機械に乗った鬼が、『戦車』が近づいていた。狭い街を破壊し、人々の体を鋭い足で背後のビルごと突き刺し、鬼の鉄球が叩き潰している。夢の光景がそのまま現実世界で行われている。山羊は立ち上がり皇帝に目を移した。皇帝は既に消えている。戦車の音しか聞こえない。叫び声を上げているのも鬼の怪物だけだ。道行く人々はそれでも無関心に戦車に近づき、呆気なく潰されていった。山羊は無我夢中で駆け出した。地獄だ。夢と比べて体が異常に重い。当然ながら、夢の気配は全く感じられない。追いつかれれば間違いない殺される。怪物の目は、明らかに山羊の姿を捉え、追い掛けている。山羊は素早く周囲を見回す。夢の世界と違ってこの街は逃げ

道も無数にある。山羊は道を逸れて、人が一人通れる位しかない路地に入った。走っていると、背後から大きな衝突音が響いた。山羊は振り返り、その場に立ち止まった。戦車はやはり路地の隙間に入りきれていなかった。崩れているのは両側の建物だけで、戦車には傷一つ入っていない。そして何語ともれない鬼の叫び声が聞こえたかと思うと、両側の建物を足と鉄球で崩しながら、無理矢理路地に押し入り始めた。山羊は再び全力疾走に戻った。

逃ゲル 逃ゲル

羊ガ逃ゲル

羊ガ一匹 羊ガ一匹

大山鳴動シテ 羊一匹

頭上で二羽のカラスがケタケタと笑いながら叫び声を上げている。現実世界。二十年以上生きてきた現実世界が根底から覆されていく。戦車に追われ、カラスに笑われている。追い越す人々は、やがて悲鳴もないままに戦車に踏み潰されていく。この地獄のような世界が皇帝の現実なのだろうか。いや、無言で死んでいくように規制している法皇と節制の抵抗もまた、地獄ではない。デパートに飛び込むと、ショーウィンドウに並ぶマネキン達が一斉に振り返った。乾いた瞳でじつと山羊を見つめ、ぎこちなく近付き始める。固いモデルのような顔の口の部分にヒビが入り、小さな欠片と共に穴が開いた。

マダ追ワレテイル

マダ追ワレテイル

ドコへ行ッテモ追ワレテイル

まさしく恐怖の映像だが、背後から近づくより具体的な恐怖に慣らされていた山羊には、それ程衝撃的には見えなかった。それ以前に街中の人間達が、マネキンのように壊れていくのを観ていたから、というのもある。自動ドアのガラスを叩き割って戦車が入り込んだ。マネキンは振動で床に転がり、何事が呟いている首が胴から離れた。山羊の常識はもう随分前から麻痺していた。当然のように朝起きて、仕事をして、飯を食べて、寝ていた生活。休日には音楽を聴き、本を読み、友人達と遊び、飲めない酒を飲んだ生活。気が付くと、そちらの方が遠い夢のように思えている。やはり二つの世界はどちらも現実だった。過ごす時間が長い方が現実となり、短い方が夢と認識されていた。それに気付いたからといって現状が変わる訳ではない。山羊はデパートの別の出口から逃げ出した。もうだめだ。戦車の轟音を聴き続けていたせいとか、耳鳴りが激しく、周りの音が籠もって聞こえている。立ち止まり息を整える。水気の少ない唾を何度も地面に落とした。ふいに背中に強風と圧迫感を受けた。振り返ると、目前まで迫った巨大な戦車。歯を食いしばった鬼の顔があった。そして一瞬後、山羊の目からはテレビを消したよう

に光が消え、闇に落ちた。

八月二十九日 夜

鼻に入る消毒液の匂いですぐに病院だと分かった。固いベッドに寝かされている。天井の蛍光灯が眩しく、目を逸らすと夜の街が見えた。静かな雨が窓に細い線を描いていた。

山羊はまだ眠っていたが、気持ちに勢いを付け何とか腰から上を持ち上げた。ぼやけた目を数回ゆっくりと開け閉めさせる。どこなのだろう。どうして俺は生きているのだろう。山羊はもう、何もかも分からなくなっていた。大きな部屋だった。白い壁がどこまでも続いており、中央に山羊のベッドが一つ置かれているだけだった。右手には切り抜かれたような窓が、空中に浮かんでいる。左手には同じく切り抜きのドアが、

床から伸びている。部屋を繋ぐドアではなく、部屋の中に置かれたドアだった。しかし聞き耳を立てると確かにドアの向こう側から人の声や、床を歩く足音が聞こえる。反対側に何も無いのが見えるのに、おかしいものだと思っただと山羊は思った。もうその程度にしか思えなかった。驚きもない。それ以上に自分がどこにいる事が分からなかった。体のあちこちを触ってみたが、どこにも傷を負っていない。戦車に潰される寸前に誰かが救ってくれたのだろうか。何の為に救ったのだろうか。死ぬ事すら許されないのだろうか。そう考えていると、左のドアがゆっくりと開いた。ドアの奥から、反対側には何も無かったにも拘わらず、清潔そうな白衣を着た看護婦が入ってきた。

「起きましたか？」

看護婦の静かな問いかけに山羊は首だけで頷き、看護婦の顔を見上げた。その顔はまさしく女帝であり、レイコでもあった。女帝だと思ったのは長い金髪であったから、レイコだと思ったのはその言葉や動きに、品はあっても威厳は感じられなかったからだ。顔はもう、見分けが付かない。

「レイコさん？」

TO BE  
CONTINUED